

序に代えて

世の中に大きく貢献して功成り名を遂げることもなく、愚直に平凡なサラリーマンとして生きて来た。それでも少なくとも世の中の片隅くらいは照らすことが出来たのではないか、と思っている。自分の周囲の狭い世界に対しては少なからず何かの役に立てたのではないだろうか。

第二次大戦の終戦間際、小学校二年の時、東京で戦災に遭い、家を焼かれて大村に疎開し、原爆を際どく免れて戦後は長崎に移住した。高校卒業までの十年間を長崎で育ち、東京に出て一橋大学に入学。昭和三十五年に卒業して三菱重工に勤め、所謂大企業の中で、修繕船営業のそれも輸出と言う特殊な世界の中で三十年近くを過ごした。五十才を過ぎてから、上司の推薦でむしろ積極的に三菱重工を飛び出して、ハウステンボスの事業の立ち上げに参画し、固いメーカーの仕事とは百八十度異なる観光産業の経営に携

わった。自然との共存を目指すハウステンボスの経営理念には共感し、経営的に成り立たせるべく努力はしたものの、時に利非ず、成功に導くことが出来ず、世の中にこ迷惑をおかけする結果となった。

家庭面では、昭和三十九年に加藤喜美子と結婚、四十年に長女美貴、四十二年に長男達直と一男一女を儲けたが、その後は十年の余、喜美子の病気との戦いに明け暮れ、五十六年に喜美子を亡くした。五年間の独身生活を経て六十一年に五十才目前で河野恵子と再婚した。それでも娘と息子の二人は何とか育て上げ、夫々に幸せな家庭を持つて孫も夫々五才になっている。

波乱万丈とは言えないまでも、決して順風満帆の半生ではなかったが、夫々の場面では一生懸命に生きて来た、とは自信を持って言えるし、その意味では悔いのない半生だった、と言えそうである。

そんなフツの人間の私が自分史を作ろうとすると、どうしても同人誌「珊瑚」を避けて通るわけには行かない。一橋大学柔道部昭和三十五年卒の同期十一人で始めたこの

同人誌が四百四十号を超えてきている。この同人誌には創刊号以来三十八年間、毎月皆勤で寄稿して来た。これらの文を中心に於いて繋いで行くことにより自分史が出来上がるのではないかと思う。

「珊瑚」が二百号に達した時、日本経済新聞の眼に止まり、文化欄での紹介を勧められて寄稿したものを最初にご披露して、序に代えることにする。

働きバチ九人 同窓誌に憩う

柔道部OB、二十五年間毎月発行の固い結束

飲んだときの話から

「珊瑚」という名の小冊子がある。私たちが毎月発行しているのだが、発行部数十二部だから、超ミニミニ小冊子とっていいだろう。私たちは昭和三十五年に一橋大学の「柔道部」を卒業した仲間、いずれも何トカ学部を出ているのだが、勉強にいそしんだというより、弱いながらも、講道館八段柴山謙治師範の指導の下で一生涯懸命に柔道をやっ

たという気持が強い連中である。「柔道部」を卒業したことを誇りにし、柔道を通じて、師範や先輩、後輩、特に永年こうした付き合いの出来る仲間を得たことを大切にしている。現在の同人は、日商岩井の大野木貞明、日清製粉の川口勉、三菱化成の杉山博光、セイカ食品の玉川哲生、三菱重工業の私、住友海上の野口健彦、塩野義製菓の馬場正平、キッコーマンの茂木賢三郎、出光興産の山本勝義の九人である。

卒業後七年程たったある日、学生気分が抜け切らぬまま集まって飲んでいる内に、山本が、お互いのコミュニケーションを図ろう、併せて物を書く場を作って書く訓練をしよう、という提案をしたのがこんな小冊子を発刊するきっかけになったのだ。月に一度、何かものを書いて幹事役のところを送り、幹事が準会員を含めて、人数分だけのコピーを作って全員に送る、という方法にした。最初は名無しのゴンベエの小冊子だったが、その後やはりこれだけ続いているものに名前がないのは残念、ということ、「三十五年卒」にちなんで珊瑚という名前をつけ、四十九年十月の七十五号以来使っている。第一号は四十二年十二月で、抜けた月もあったが、ほとんど毎月発行し、五十一年十

二月に二〇〇号を突破し、この四月で二〇〇号を数えることになったものである。卒業後ちよつと二十五周年を迎えるこの時期に、この小冊子が二〇〇号になったのは偶然とはいへ面白い一致だった。よくも二〇〇号も続いたものだ、と私たち自身感心している。

記事の内容はもう自由としか言いようのない種々雑多なもので、近況報告、仕事の紹介、悩み、紀行文、書評、世相評、ゴルフや子供の自慢等々何でもあり、肩を張らずに、あいつらに会つたらこんな話をするだろう、といった気軽な内容が多く、その雰囲気は長続きの理由だと思う。幹事は一年交代で持ちまわり。たまたま今年は私が幹事役であり、この紹介をさせてもらつているといふわけである。

参加度は当然のことながら大いに個人差がある。絶対に休まないという頑固な常連から、寄稿数が少なく、読む方で積極参加しているという会員までいる。変に強制せず、読むだけの会員でも良いではないか、というフワツとしたくり方しているのも長続きの理由のひとつだろう。

珊瑚も世の動き反映

総投稿数は千百四十八通になり、一冊平均約六通。テーマの変遷が、この四半世紀の歴史の流れを反映しているのが面白い。私たちが学校を出た昭和三十五年は、所得倍増計画論に乗って、高度成長がはじまった時期で、また、私たち自身が若くて張り切っていたせいもあって、珊瑚も初期は仕事の話でも威勢の良いのが多かった。書生っぽい経済論みたいなものもあった。人探しに奔走する苦労話なんかもこの時代を反映するものである。労働組合に係る同人が、一人ならず出ていたのもこの時期で、全く異なつた立場から経営を見る驚きや疑問、悩みなどがテーマになっていた。

海外への進出が多くなつた時期もあつた。海外や新しい任地での仕事、さらには新しいものに接しての紀行文が切れ目なく毎号続いた。私自身、十年前ロンドンに二年間駐在したが、ロンドン便りは二十四回を数え、遠く離れていると珊瑚のやりとりが本当に楽しみだった。今は全員日本にいるが、それぞれ海外へ出かける機会が多く、紀行文的なものは相変わらず自立つ。

その内に、公害問題や住民対策に悩む話が出て来る。人件費の高騰に苦勞する話、二

クソンシヨックやオイルシヨックでひどい目にあつたなど、高度成長のところが同人にもふりかかつて来る。管理者の仲間入りをしはじめると、管理者としての悩みが登場する。好況業種が時とともに不況業種化して行く話、新分野への進出の苦勞等、皆働いている分野が異なるだけに興味深く読まされる。

最近健康もの増加

個人的には、子供が生まれ、大きくなって来ると、子供の自慢話、子供について考えさせられることなどが取り上げられる。家族は全員準会員で、女房族や子供たちからの寄稿もある。子供は最初のころは覚えてのたどたどしい字の作文だったが、今や正会員に勝るとも劣らぬ立派な紀行文やら、英詩なんかが出て来て、時の流れを感じさせてくれる。最近健康に関する話題が多くなっている。往年の柔道部の元氣者たちも、年相応に疲れを感じつつあるということなのだろう。

趣味、娯楽のテーマもあることはあるが、数は多くない。この同人グループはどうやら、仕事本位の働き者の典型的な日本人中年像を代表しているようである。

この小冊子の第一のメリットは、お互いのコミュニケーションが実に良いこと。勤務地が離れていたたり、忙しくてなかなか会う機会がなくても、毎月会っているような気になっていて、たまに会っても全く違和感がない。何年振りで会っても離れている間のこととしゃべる必要がなく、すぐにヤアヤアということになる。

月一度の寄稿というのは、最初のころは良かったが、段々テーマが種切れになって、締め切り間際になると、テーマ探しに苦労することになる。でも面白いもので、これだけ続けて来て月に一度は何か書く、という癖がつくと、これが生活の一部になっていて、もの見方が変わって来ているのに気がつく。これをテーマにしようと思つと、そのつもりで対象を見たり考えたりするから、頭の中が整理されるような気がする。

仲間の追悼号、悲し

こうして会員、準会員一同は、毎号を手にするのを楽しみにしているのだが、この中で何度読み返しても残念な痛恨の号とでもいうべきものが二号ある。

最初は五十一年八月の九十六号。当時三菱商事本社の化学品二部に勤め、海外駐在経

験も豊かに活躍していた岡崎信夫が七月四日急逝したときの追悼号である。岡崎は学生時代の柔道でも抜き役だったし、同人の中でも積極派の中心的存在だった。

二番目は、その後一年もたたぬ翌五十二年六月二十八日、大日本印刷の京都事業部で総務課長の要職にあつた渡辺雅司が急逝したときに発刊した追悼号で、五十二年八月の一〇八号。渡辺は地味だが仲間の兄貴格であり、まとめ役的存在だった。珊瑚への寄稿も人柄を示すように人生や仕事に対する悩みを中心にジックリ書き上げた文が多く、皆に何かを考えさせた。

いずれの場合も、両人が珊瑚に書いて来た原稿を整理し、また周囲の皆さんにお願いして思い出の文を集め、それぞれ「夭折」「寛容と努力の人」と題する立派な遺稿集・追悼文集を上梓（し）した。しかしながら、残されたご家族が、それぞれに力を合わせて、元気にやっておられるのは心強い。皆さん準会員として残って頂き、珊瑚への投稿にも行事にも参加して下さっている。

第三番目は、準会員ながら、かくいう私の妻が、五十六年四月、十年余の闘病生活の

あと亡くなったとき作っていたいただいた五十六年五月発刊の一五三号。この時は同人及び夫人全員の寄稿を得て、立派な追悼号が出来た。

というわけで、このミニミニ、ここまで来たらオイソレとやめるわけには行かない。二〇〇号発刊記念の家族会でもやり、サンゴオーブンゴルフ会で景気をつけて、これからも営々と一号一号積み重ねて行くつもりでいる。(ながしま・たつあき「三菱重工業 横浜製作所勤務」)

(日本経済新聞 昭和六十年四月八日号 文化欄)

生い立ち編

家族のこと

昭和十二年七月二十六日、父達吉と母富美の長男として誕生。本籍地は東京都千代田区神田だが、神田に住んだ記憶は全くない。幼少時のことについて、母が書き残してくれたものの中から二ヶ所ほど抜粋する。

幼少時

『・・・達明の名前は初めての子供ではあるし、姓名判断の本を買ってずい分考えました。達吉の「達」は使いたいし、それには八画が徳川家康と同じになるので、八画の中から探しました。結局、明治神宮を目前にして生まれ、恐れ多いことながら皇太子様が

明仁でいらっしやるので、何かお役に立てる国民になつてもらいたいという願いを込めて「達明」と致し、珍しい名前と思つていましたら、世の中には同じ名前をつけていらっしやる方があることが後にわかりました。』

『・・・その頃から達明が自家中毒に罹り、よく入院しました。ハシカで高熱を出し、肺炎の恐れがあると言われた日、丁度入江の叔父様が見え、お父様はおもてなしにお酒を沢山飲まれ、私の心配も他所に、叔父様は、未だ若いから子供はいくらでも出来る、などと、暢気なことを言つたりなさり、私は、達明が死んだら私も死ぬ、位の気持で心配しました。お父様は、私の心配症を和らげようと思われたのが、四十度ならそれ以上に上がることはないから、これからは下がるばかりで心配はいらない、と申されましたが、私は心配で、東京に電話してお母様に、応援に来て喪服を持ってきて下さい、と頼んだので、それも後で有名になりました。

達明は歌が上手で色々覚えてお客様がいらっしやるとよく歌いました。「チヨンチヨンナーニ」（今度は何を歌うか）と言つて・・・。私は神経質で、暇にまかせ、夜でも

昼でもオムツが濡れていないとおまるにさせましたので、もう八カ月頃には「ウウン、ウウン」と教えるようになり、早くオムツが取れ、オネシヨしたことは余り記憶にありません。どこへ連れて行っても、可愛い可愛い、とお菓子を頂いたりするので、それも自家中毒の原因になったようです。一丁三才の頃、二丁四度入院したようでした。』

物心がついた頃は、渋谷の代々木に住んでいた。第二次大戦の真つ只中で、父は戦地に赴いていた。代々木の山谷小学校に入学したものの、入学の頃の記憶は全くない。学校どころではなかったのだと思う。二十年五月の大空襲で家が焼けて母方の郷里、長崎の大村に疎開した。原爆の光は大村で遠望し、終戦は大村で迎えた。この辺のことについては、祖父の思い出の中に詳しいので引用する。

尾崎 清一氏のこと 五十回忌に当たって思い出すままに

尾崎のオジイちゃんが亡くなって、五十回忌を迎えました。大村で亡くなったのが、昭和二十四年二月六日のことで、今の尾崎家の当主、義明もまだ二才の頃のことですから、オジイちゃんのこと、今日、出席してくれている人は誰も知らないと思います。こうして、誰も知らない孫や曾孫が集まって、オジイちゃんの法要をすと言ふことは、尊いことだと思えますし、有り難いことだと思えます。法要は、大体、五十回忌で打ち止めということになっていますので、この機会に、子供の頃ではありませんたけれど、唯一、オジイちゃんに接した記憶のある私から、オジイちゃんについての思い出をお話して見ようと思えます。

一 お母さまが書いた「思い出すこと」によれば、尾崎家は元々お侍の家系だったようですが、明治になってお侍がなくなったので、長崎でお饅頭屋をやっていた、と言われます。オジイちゃんは頭が良かったけれども十八才のときに父親が亡くな

つて、大学には行けなかつたので、長崎商業を卒業し、今の三菱重工の前身の三菱造船に入社されています。勉強家だつたようで、英語は外人から習われたとのことで、会話はお出来になりましたし、英字新聞を読んでいられたとのことです。実際、私も終戦直後、大村でアメリカの兵隊が家に来たとき、キッチンと英語で応対されていたのを見たことがあります。ドイツ語やフランス語も機会を捕らえて勉強されていたとのことですし、運動ではテニスや登山、その他、囲碁、将棋、トランプ、か
るた、絵やお謡い、お習字なんかも良くされたとのことです。カメラも三台持つていられたことがあつたとか、天体望遠鏡も持つていられたとか、花を育てることも上手だつた、とか、明治十年生まれといいながら、かなりのモダンボーイで、趣味の多かつた方のようです。

二・三菱造船では、その後、東京に暫くおられた後、名古屋に長かつたようです。現在、三菱重工に名古屋航空機製作所、という工場があります。この前身の三菱内燃機と言う会社を作るに際して、名古屋に行かれたものと思われれます。経理関係

の仕事がされていたと聞いています。お母さまが生まれたのは長崎ですが、名古屋に長く住んでいられたと言うのは、オジイちゃんのお勤めのせいでしょう。その後東京で定年を迎えられたのだと思います。

三・ シツカリした厳しい人で、どちらかと言うと我が侷な梅オバアちゃんにとっては苦手な方だったのではないか、と思います。お姑さん、小姑さんが、これ又厳しい人だったそうで（オジイちゃんの姉に当たる小姑は、梅野の伯母さまと言って怖い人でした。この伯母さまの孫が、喜久子さんと言って、私の重工時代の仲間の三浦修司さんに嫁ぎ、長崎に住んでいられます）若い頃、オバアちゃんも何度か家出をしたりしたそうです。私は小さい頃、左利きでした。昔は、左利きは良くない、とされていたのか、厳しく矯正されました。食事中、末席で左手で箸を持っていると、一番上席で、正面に向かって座っているオジイちゃんから「ヒダリツ！」と大声で怒鳴られたのを良く覚えています。お蔭で、左利きは、いつの間にか、どこかへ行ってしまいました。

四・ 私が物心がついた頃は、引退して、渋谷の代々木、山谷と言うところに住んでいられました。お父さまが戦争に行っていて、お母さまと私と慶子と生まれて間もない輝子が近くの小さな借家に住んでいましたが、二十年の五月の大空襲で家が両方とも燃えてしまいました。遅ればせながら、長崎に疎開することになり、二十年の六月、大変な混乱の中を汽車に乗って、二・三日かけて長崎に来ました。最初、長崎、田上の平松（喜一郎さんの祖父の喜三郎さんはオジイちゃんの実の弟で、平松家に養子に行かれた方です）の世話になり、その後、大村に家を探して住むことになりました。お父さまが戦争に行っていて留守の間、男手はオジイちゃん一人だったので、一家を守ってくれたのです。

五・ 元々、サラリーマンなのに農業を勉強して、畑仕事をして、私たちが食べるものを作ってくれました。最初は、さつまい芋とカボチャばかりでした。さつまい芋は土に埋けて貯蔵し、カボチャは納屋に積んでありました。これが毎日の主食でしたから、顔や肌や爪が黄色くなるほど食べました。当時は他に食べるものがないので、

文句も言えませんでした。私は今でも、この二つは苦手です。一生分食べてしまった感じで、もう沢山と言つ感じ。農業の技術も段々に進歩して、後の方では、小麦なんかも作れるようになっていました。石臼で挽いて、小麦粉を作るのですが、手に血豆が出来て痛かつたのを覚えています。

六・ 終戦直後は、自給自足の生活でしたが、どこかに心の余裕を求めようと努力をされたのだと思います。お正月に羽子板を作ってくれたことがありました。板を探してきて、自分で鉋で削つて、糸鋸なんてありませんから普通の鋸で切つて、羽子板の形を作りました。板には火箸を焼いて絵も書きました。鶏の羽根を拾つて来て、椿の実を使って羽根も作りました。手製の羽子板は厚くて重くて、子供の私には扱うのが難しかったけれど、お母さまとかアッコちゃんのママなんか、喜んで羽根突きをやっていました。余裕と言えば、終戦前後の大変な時に、麻雀なんかやっていました。空襲になると灯火管制と言つて、外に電気の明かりが見えないようにしなければならなかつたし、良く停電にもなつたのですが、ローソクをテーブルの中央

に立てて、皆銘々に白い紙を持って、手元で反射させながらやっています。昼間は、食うや食わずやの生活をしていた訳ですから、これこそ本当の心の余裕だったのでなかったでしょうか。私は後ろで見ている役でしたが、麻雀は小学校の頃、こうして覚えました。

七・子供が、女ばかりの四人姉妹でした。お母さまが長女、次女が根岸の喜美子叔母さん。三女に美智子叔母さんと言う人がいました。大阪の鈴木さんと言う方に嫁がれていましたが、オジイちゃんが亡くなって間もなく、若くして結核で亡くなりました。皆が豊後町に来てからのことで、暫く二階で療養されていたし、オバアちやまが毎日サンフランシスコ病院に看病に行っていたので覚えているかも知れません。四女がアッコちゃんのママの恵美子叔母です。当時は、男の後継ぎ、と言うのが大切で、お父さまとの約束が出来ていたらしく、長島家の二人目の男児は尾崎家を継ぐことになっていました。で、義明は大村の家で生まれましたが、生まれた時から尾崎姓になり、現在、尾崎家の当主と言うことになっています。

八・ お父さまが二十一年の五月に復員して来て、会社の関係で長島一家は昭和二十三年に長崎に移り住むことになりました。大村はオジちゃん、オバアちゃん、アッコちゃんのママの三人になりましたが、時々は行ったり来たりしていました。オジちゃんは、毎朝、自己流のラジオ体操みたいなものをしたりしてお元気でした。前の晩もご機嫌でいらしたのに、二月六日の朝、起きて来られないので、オバアちゃんが見に行ったら誰も知らない内に亡くなっていました。脳溢血か、心筋梗塞だったとのこと。長患いすることもなく、誰の世話にもならず、心配も掛けないで亡くなりました。

九・ いかにも、明治の人、と言う感じの立派なおジちゃんでした。戦時中から戦後にかけて、私たちは、実際には、本当にお世話になったのです。五十回忌が過ぎてからも、何時までもこのことを忘れないで、お墓参りをしたいと思います。

俗名 尾崎 清一

昭和二十四年二月六日没

行年 七十三才

(平成十年十二月二十日 五十回忌に当たり作成した小冊子より)

祖母 尾崎 梅のこと

この祖母には本当に可愛がって貰った。特に大学の四年間というものは、三鷹で二年、成宗で二年間、文字通り連れ添って面倒を見てくれた。昭和六十年七月、九十五才で亡くなったときに書いたものをご披露する。

長崎の祖母が七月三日、九十五才で亡くなりました。祖母は私の学生時代、成宗、三鷹と四年間付き添ってくれ、三鷹のパーティの折などで皆さんご存知の方が多くでしょう。あの頃は大変な元気で、馬場兄を同伴に神田・日本橋の三越本店から当時の白木屋、松屋、銀座三越經由松阪屋まで行き、また同じデパートを見ながら戻って、同兄を閉口させたほどでしたが、その後も元気で九十近くになるまで長崎と東京の間を行き来していました。この正月帰省した時も麻雀の付き合いをさせられるほどの元気でしたし、その後も起きている方が多い生活をしていたそうですが、一ヶ月程前から食が細くなり、段々に弱って行つたようです。病院の嫌いな人でしたからギリギリまで上小島の家で寝ていて、病院に移ってから六日目に亡くなりました。栄養源だった甘いものを口にしなくなつた、と言うのも身体が要求しなくなつて自然と体力を衰えさせて行つた、と言うことなのだろうと思います。消え入るような大往生だったそうです。どこが痛いわけではなく、苦しむわけではなく、長患いで人に迷惑をかけたり自分が気兼ねするわけではなく、理想的な亡くなり方だと思えました。寝込んだ、と聞いて三週間前に見舞いに行つた時

は、横になっていたものの頭も目を耳もシツカリしていて、昔話なんかしたことでした。既に悟りの境地になっていたと思われませんが、流石に帰るときは淋しそうでした。又来るから元気を出してくれ、と言う言葉が空しい思いました。お慶姉御はまた大活躍で世話になりました。通夜には行けず、葬儀のみ七月四日日帰りで行ってきましたが、孫が総出の手伝いでコジンマリした良い葬式でした。

天寿院梅譽香薫大姉 良い戒名をつけて頂きました。

父 達吉のこと

父は昭和五十六年六月七日に亡くなった。長崎倉庫の社葬にあたり、親族代表の挨拶をした。

『親族を代表してひと言ご挨拶申し上げます。本日はご多用の中を父達吉のためにか

くも多数ご会葬くださいましてどうもありがとうございます。又、生前は何かとご厚誼を賜り、誠にありがとうございます。

父は六月七日夜、眠るように安らかに亡くなりました。二年前に倒れてからの闘病生活でした。皆さまの温かいお見舞いに元氣付けられ、手術後丁度二年頑張り通し、子供達に見取られての大往生でした。

父が長崎に参りましてから三十五年になります。皆さまの温かいご支援ですっかりジゲモンになったようでした。長崎が好きになり、長崎のためになることをしようと思っていたように思います。仕事一途の男で、趣味らしい趣味とてなく、読書と散歩が楽しみという堅物ではありませんが、常に世界の平和を考え、ユネスコ、教育委員会、捧誠会などと少しでも社会のお役に立つことを考えていたと思います。

家庭では厳しい中にも温かみのある良い父親でした。若い頃から仕事が忙しくても出来るだけ家庭の皆と接する機会を作ろうと努力していましたし、病弱の母を助けて朝の食事を作ったりする意外に家庭的な面も持ち合わせていました。特に、孫が出来

てからは何かにつけて孫と接するのが楽しみで、目を細めて孫の相手をしていた姿が目には浮かびます。

私の口から申すのも変ですが、立派な父でした。私ども子供一同は、父や母に恥ずかしい行いは出来ない、と言うことでここまで育ててきたのではないかと思えます。若し、もう一度生まれ変われるものなら、同じ父と同じ母の子として生れたいと思っています。

ご覧の通り、残された我々は母親と若輩ばかりの兄弟です。これからも母を助け、兄弟助け合つて父に恥じない生き方をして行きたいと考えています。皆さまの暖かいご支援をお願い申し上げます。

本日はどうもありがとうございます。』

ごつた返しの中で原稿を作り、当日は大勢の面前で見苦しい真似だけはしたくない、と込み上げる感情を押しさえながら挨拶したのでしたが、大過はなかったように思います。

小泉信三が長男を戦争で亡くし「海軍主計大尉小泉信吉」という本を出していますが、この中に次の一文があります。

『信吉の容貌、信吉の性質、すべて彼の長所、短所はそのままとして、そうして二十五までしか生きないものとして、さてこの人間を汝は再び子として持つことを願うか、と問われたら、我々夫婦は言下に「願う」と答えるであらう。』

私は大分昔にこれを読んでいたく感激しました。人の子として生まれた以上、親にこう言うことを言つて貰えるような子でありたい、と思ひましたし、それ以来、心のどこかにこうした意識があつたように思います。挨拶の中の一節は実はこの裏返しなのです。

長崎に一週間は無我夢中。何とかシツカリせねば、と思つてやりましたが帰つてからの一週間のつらかったこと、長かったこと。流石にダブルパンチは堪えませんでした。徐々に元に戻して行く積りです。在京の諸兄、厄落としの機会でも作ってください。

(昭和五十六年六月二十一日)

父の思い出

父が亡くなった時、思い出を書いた。

一・復員

私の記憶に父が登場して来るのは、どうしても一枚の写真からなのです。

海軍の純白の夏の制服に正装し、軍刀を持って立っている写真。もつと若い頃、海辺で私と一緒に撮った写真もあるのですが、この写真が特に印象深いのは、きつと出征の留守を守っていた母が、事ある毎に何度も見せてくれたからだ、と思います。東京高等商船を卒業して暫くは船に乗っていたようですが、比較的若くして船を降り、陸で船を運航する側に立っていたと言いますから、若い頃から人の上に立つ気性だったのでしょう。父方の祖父は役人だったそうですが、早くに亡くなり、男五人、女二人の家族の二

番目に生まれた父は、父親代わりになって弟妹の面倒を見ていた、といます。お蔭で私は叔父や叔母にはずい分可愛がられたものです。

海軍に召集されたのが昭和十六年と言います。いずれにしても私が物心ついた頃は父は戦地で、戦時中とはいえ母を中心に幼かった妹たちとの生活でした。男と言えば母方の祖父のみで、何事につけ柱でした。その頃は代々木に住んでいましたが、夜中に空襲を受けて防空壕に入ってB29が通り過ぎるのを待っていたのも、小さい手で薪を割って七輪でご飯を炊いたのも、雑炊か何かの炊き出しか配給を待って、暑い日中長い間行列を作っていたのも、代々木の家が焼けるのを見ながら火の中を逃げ回って明治神宮の森の中の馬小屋で一夜を明かしたのも、皆母と一緒にの思い出です。二十年五月の空襲で家が焼けた夜、母は輝を背負い、私は慶の手を引いて逃げ出したのですが、途中、小田急線の踏み切りのところで立ち止まり、振り返って見ると石垣の上に立っている我が家が燃えています。母が、シッカリ見ておくのよ、と言っ意味のことを言いました。皆、走って逃げて行く中で私たち四人はずい分長いこと、ここで立ち止まって見ていた

ように思います。あのシーンは忘れることが出来ません。

ですから、私が父と初めて接したと言う感じを持ったのは、昭和二十一年に父がラバウルから復員してきた時、と言う事になります。戦災の後、私たち一家は母方の里の長崎は大村に移り住み、そこで終戦を迎えたのですが、父が帰って来たのはその翌年の夏だったと思います。学校から帰ると、父が帰って来る、母が駅まで迎えに行っている、と言うのでカバンを放り出して（当時はランドセルなんて立派なものはなく、母が焼け焦げのコートの地を繋ぎ合わせて作ってくれたいわゆる背嚢でした）家の横の切通しの坂を駆け下りて、春日神社の下の階段のところ立ってみると、田んぼの中に真っ直ぐに伸びる田舎道の向こうの方、踏み切りの辺りにそれらしい一団が見えました。駆け出して行ってみるとやはりそれは父で、迎えに出た母と東京から一緒に付き添ってきた祖母が一緒でした。写真の凛々しい姿とは打って変わって、復員服に戦闘帽をかぶり、やせて色が黒く、目ばかりがキラキラしている人だ、と言うのが最初の印象でした。復員後は身体も弱っていたようで、マラリヤが出る、と言って黄色い薬を飲んでいました。

キニーネと言つこの薬の名前はこの時憶えたものです。栄養失調の名残とかで後頭部に出来たオデキが中々直らなくてずい分長いこと苦しんでいたようでした。よくガーゼの取替えを手伝わされたものでした。

戦争の話をするのは嫌이었다ようで、あまり話をしてくれませんでした。香港に一番乗りして港内を掃海した時の話、機雷の撤去作業中、誤って爆発してしまつて危うく九死に一生を得た話、位のものでしたでしょうか。終戦時は少佐でラバウル守備隊の副官という立場とのことでしたが、捕虜になつてからは米軍との連絡役になり、結局部下を皆帰してから最後に歸つて来た、とか断片的にしか話をしてくれませんでした。敗戦で日本をこんな国にしたのは我々の年代なのだから、少しでも良い日本にして次の世代に渡さねばならない、と話していたのも戦後間もなくのことでした。そういえば昔話らしいものはあまり聞いたことがありません。いつも前向きに生きていたから戦時中を振り返る暇なんかなかったのかも知れませんが、でも八紘会とかいうラバウル仲間の会があつて、年に一度位会合を持っていたようですから、仲間内ではこんな話

もしていたのかも知れませんが。

二・長崎倉庫

少し休んだ後、三菱倉庫に籍を置いて門司支店に勤務することになりました。いわゆる単身赴任。土曜の夜帰って来て、日曜の夕方出て行くという生活。日曜日には慣れぬ手つきで畑仕事の手伝いもしていました。留守宅を守っていた祖父が、これもサラリーマン上がりで農業の知識なんかまるでなかった筈なのに畑を始め、色々と工夫して色々なものを作って私たちを養ってくれました。芋、麦、カボチャ。さつま芋やカボチャは良く出来て、これが主食になりました。カボチャは納屋に一杯積み上げ、芋は土に穴を掘って埋めてありました。お蔭で飢えることはなかったけれど、毎日毎日カボチャ攻めで顔が黄色くなるほど。ですから今もってカボチャとさつま芋は苦手です。その畑を手伝うのですが、慣れぬものですから麦刈りかなんかのとき、鎌で指を切って大怪我をしたことがあります。乱暴するからだ、なんて母に叱られていました。

田舎に買出しにも行きました。私達の住んでいた大村もかなりの田舎ですが、ここから山を一つ越えたところに遠い親類の農家があつて、着るものか何かと食べ物と交換してくれたのだと思います。私も祖母や母について良く行つたものです。距離にして往復三・四里位はあつたのでしょうか。子供の足にはかなりつらい道程でした。朝から出かけて行つて、昼、白いご飯をご馳走になり、帰りは小さいリュックに何か一杯詰めてもらつて帰つて来るのです。父とは一度だけ行つた記憶があります。やはり悪いことをしている、という意識があつたのでしょうか。暗くなつてから先方を出て、夜、暗い中を田んぼのあぜ道みたいなところを歩いていたら、警官の誰何に遭いました。父は正義感が強くてああしたことはおよそ嫌いだったはずで、やること自体大変な抵抗があつたらうと思ひますが、運悪く警官の咎めを食らうような仕儀になり、このときは無念だつたに違ひありません。

その頃、小学校中学年だつた私は野球が好きで、毎日、野球・野球でした。グローブなんてありませんでしたが、母が焼け残りの布で手製のグローブを作ってくれ、これを

使っていました。少し経つと自分でもキャンバスの布を貰って、グローブやミットを作ったものです。ボールも軟式のボールが貴重品で、大事に使うのですが、質が悪いのかすぐに割れてしまい、割れるとボールを買う金がないのでゲームは終わりと言う事になりました。ボールも色々工夫して自分で作ったものです。そんな或る日、門司から帰って来た父が皮製のグローブをくれました。今のグローブみたいにシッカリしたのではなく、豚革（？）か何かのフニャフニャのものでしたが、初めて手にした自分のグローブです。嬉しくて嬉しくて、そのままかかえて外に出て野球仲間の高学年生や中学生が帰ってくるのを待ちました。畑の向こうにその一団が見えたとき、グローブを買ってもらったゾー、と叫びながらあぜ道を駆けたものです。皆もそれを聞きつけて駆けて来てくれて、一緒になって喜んでくれたのを良く覚えています。私は図画が苦手の良い点を取ったことがなかったのですが、宿題が何かでこのグローブを線画で写生して賞を貰ったことがあります。絵で賞を貰ったのは確かこの一度だけです。やはり描き手の愛情がこもっていたのだらうと思います。毎日抱いて寝んばかりでしたから。

その内に長崎に倉庫会社を作ろうということになり、大村の航空隊の格納庫の払い下げを受けて長崎へ持って行き、そのまま倉庫として使おう、と言う事になったようです。父と二人で長い紐を持って草生した航空隊の用地に入って行き、格納庫の大きさを計測する手伝いをしたものです。こうして出来たのが長崎倉庫で、この格納庫が倉庫の第一号だったのでしよう。四・五年前に創立三十周年を祝ったとのことです。私はこうして創業の片棒を担いだことになります。という事で、長崎に会社が出来たからでしょう、昭和二十三年には一家で長崎に移りました。父の場合、こうしたことで金は持っていた筈はなく、金を出せた筈はないけれど、最初から経営者として参画したようで常務ということでした。重役方も何人が居られましたが、出資者が殆どだったようで、父の他数人で経営を切り回していたようです。この頃の父はいかにも眼光炯炯という感じで子供心にも凄みすら感じられました。短気で、気に入らぬことがあると会社でもバカヤロウと呼ばわりをしていたそうです。それでも叱り方がサツパリしていて後を引かなかったそうです、会社の若い人が良く出入りしていました。何かことがあると家に集まって酒を飲

むので、母や祖母が大変でした。正月なんて大勢の客のために何日も何日も前から何十人分ものご馳走を作っておき、そのご馳走を置いておくための大きな棚を作って貰った程でした。会社で何をやっていったのか、子供の私には判るすべもありませんでしたが、何か仕事が旨く行った時の会合の後だったのでしょうか、帰って来るなり母を抱きしめていたことがありました。母は、子供が見ている前で嫌ですよ、とか何とか言っていました、若い父の一面を見たような気がします。

父の出張について東京まで出てきたのもこの頃のことでした。夏休みか何かだったのでしょうか。楽しみにしていたのに当日になって風邪か何かで熱を出してしまい、これでは連れて行けぬ、と言われ、悲しくてベソをかきながら昼食を食べていたら、慶が同情して盛んに父を説得してくれて、やっと連れて行って貰えることになりました。その頃の長崎・東京間は文字通りの汽車。雲仙号で、煤で真っ黒になって行ったものです。新橋の陸橋を渡りながら、ここを真っ直ぐ行ったら虎ノ門だ、と教えてくれたのが不思議に忘れられません。父の仕事中は、下北沢の祖母、叔父の家とか、田無の学生寮みたい

なところに行った叔父のところに行っていました。確か桐生にいた伯父のところへ行つたのもこの時のことで、暑い中を駅前で買った塩せんべいを齧りながら（父は塩せんべいが好物でしたから）歩いた憶えがあります。帰途、神戸の叔母の家に寄り、帰りの汽車に乗りました。家が近づくにつれ、何となく家が恋しくなつて、窓に向かって外を流れる景色を見ながらホロリとしていた時、「やっとホームシックにかかったな」と覗き込んだ父の笑い顔が鮮やかに思い出されます。

三・趣味

およそ趣味のない男でしたが、スポーツは好きでした。野球が特に好きで、自分でも得意でした。後樂園に連れて行ってもらったのも、あの出張について行ったときのことだと思えます。帰つて来たら全盛時代の川上を見て来たというので、近所の子供達の間では評判で、暫くは大きな顔が出来ました。会社に野球（父は、野球、とは言わず常に、ベース・ボール、と言っていたように思います。あの年代の人で野球をやる人

は少なかったようで、進んだ人だったのでしょう)のチームを作って、常務自ら大将でした。サードでクリーン・アップを打ち颯爽としていました。ゲームでも良い加減でなくいかにも真剣にやっていました。何事に対しても真面目に取り組む姿勢、例えそれがスポーツでも遊びでも、やる以上は真剣にやろう、と言う精神を教えてくれたのは父のこうした姿だったのではないかと思います。キャッチボールの相手もずい分してくれました。四十台の父の投げる球は早くて、子供の私の手は赤くはれ上がりました。

若い頃から鍛えていたのでしょう、水泳も得意でした。海水浴には良く行ったものですが、いつもいきなりドボンと飛び込むなり、クロールの全速で真っ直ぐに沖へ沖へと泳いで行くので心配したものです。一気に沖の方へ行ってしまう、頭が小さくなった頃止まって、岸に向かって合図すると今度はゆっくりゆっくり平泳ぎか横のしで戻ってくる、と言う泳ぎ方。今にして思えば余程身体に自信がないと出来ない泳ぎ方だと思います。水泳はずい分年を取ってもこんな調子でした。

身体を動かすのはオツクウがらなかった方で、山歩きにも行きました。会社で家族ぐ

るまで遠足に出かけたことも再々でしたが、急に、明日山登りに行こうということになり、父と母と私と慶の四人で朝暗い内から出かけたことがあります。下の三人は小さいので置いて行くことにし、暗い中でソーツと支度をしてコツソリ出かけました。一番の汽車で多良岳と言うあの辺では一番高い山の近くまで行き、登り始めたのは良いのですが、急なことで、こんな具合に出てきたものですから、弁当の用意がありません。上に行けば何かあるだろうと歩いたものの頂上には何もなく、お腹はペコペコになり、午後も遅くなってやっと下り坂で何かの小さな店を見つけ、ソーメンを買って、頼み込んでそれをゆでて貰い、缶詰の大和煮の汁かなんかをつけて食べました。あの時は流石に父も慌てたのではないでしょうか。

私に柔道を勧めてくれたのも父でした。戦後、柔道が解禁になり、中学に入りたての私には、純白の柔道着と白い帯がいかに清潔でやってみたくらいと思いき、相談したら、お前は足が遅いから柔道位が良いかもしれない、道具に金も掛からないし、と言ってすぐに許してくれました。始めてから三・四ヶ月経って初めての対外試合に出たときは態々

遠いところまで応援に来てくれました。最初に当たった大きいのを、それしか出来ないと言う袈裟固めで破り、誇らしげに父の方を見たら、父の顔はクシャクシャでした。弟たちにもラグビー、ハンドボールと夫々やらせていたのはスポーツに理解があつたからなのでしょう。

他に趣味と言えるのは麻雀でしょうか。でも、これは付き合いの方で、好きでやる方ではなかったのではないかと思えます。家庭麻雀は我が家の伝統で、祖父が生きていた頃は戦後、電灯が不自由なときですらローソクの灯でやっていました。私が麻雀を憶えたのもこの家庭麻雀からで、中学のときにはもうやっていました。父は正メンバーではなく、早く帰ってくる相手になつてくれたものです。客を連れて来て家中でお相手する、と言うケースが多かつたようです。私は中学から高校にかけて商船学校に行きたくてずい分父とは話をしたものです。父は自分の経験から船の仕事が大変なことが判つていたのでしよう、こればかりは賛成してくれませんでした。私が味方につけようとした叔父なんか唝鳴られていました。そんな時、長崎に入港して来る船の船長さん方を家に

連れて来て、私を酒や麻雀の席に引つ張り出して話を聞かせるのです。これら船長さん方は父の昔の仲間だったり、先輩・後輩だったりで「船長と言う仕事を選んでも、自分に合っていれば良いけれど、将来自分の適性に合っていないことが判った時、選択肢が狭いから止せ」と言う様なことを言わせていたようです。私もこれには大分抵抗したのですが、高校二年の時に諦めて、一転文科系の大学を選ぶことにしたのでした。

酒は良く飲みました。もっぱら日本酒で晩酌は殆ど毎晩でした。正月になると床の間を背にして、大勢の客を相手に朝からやっているの、夕方になると流石に床の間を枕に寝てしまうのが年中行事でした。良い酒で、あまり多くを喋るでなく、ニコニコと人の話を聞きながら盃を傾け、崩れることがありますでした。飲み過ぎると寝てしまうのがいつものパターンでした。長崎にいた頃の私はもっぱらお燗番で、相手にさせて貰えませんでした。大学に入つてすぐの夏休み、デパートでアルバイトをしていたら、今日は飲もう、と言うことになり、ボン・ソワールと言う長崎では一級のバーに連れて行つてくれました。ホステスなる人種に囲まれ、ダンスのステップを習つたりしました。

父とはどんな会話をしたのか。黙ってニコニコとウイスキーグラスを傾けていたようです。自分の息子もやっと自分と一緒に酒が飲めるようになった、と言う感慨が一入だけに違いありません。

本が好きでした。趣味と言えそうなのは読書位ではなかったかと思います。文学ではずい分昔からクローニンと言う作家のものを集めていて、出る度に探し出して買って来ました。その他、時事もの、政治もの、日本人もの、歴史ものとありとあらゆる分野の本。これは乱読という事でしょう。リーダーズ・ダイジェストなんかは原文で読んでいました。最後まで学ぶ姿勢は崩しませんでした。英語の力は相当なものだったようで、商売上外国人と付き合うのには不自由しなかったようです。洋画を観に行くとき字幕でなくナレーションを聞いていて、とんでもないところでワツハツハと笑い出すので恥ずかしかった、と母が言っていた事がありました。

晩年は、健康維持のためか良く散歩に出たようです。休みになると朝から二時間も三時間も坂の上り下り。それも辺りを見ながらブラブラ歩く、と言うのではなくて、ひた

すら早足でセッセと歩く形の散歩で、一・二度付き合ったことがあります。こちらが閉口するほどでした。こうして最後まで身体には自信を持っていたようで、脳の病気で倒れた時、見舞いに行ったら「思わぬ伏兵にやられた」とつくづく言っていました。身体は大丈夫、と思いついでいたので急にあんなことになり、大変にショックだったのだらうと思います。

四・仕事・公職

仕事の方は、倉庫会社を始めて暫くして運送会社を預けられ、社長をやっていたことがありました。これは苦勞が多かつたようです。間もなく株主さん方とケンカしたとかで社長を返上し、元の倉庫会社に専心することになりました。初代の社長は大洋漁業の中部一族の方でしたが、早くに亡くなり、二代目も亡くなって父は長崎倉庫株式会社の三代目の社長ということになりました。

こうして段々に父の長崎での活躍が始まった訳ですが、私が昭和三十一年に高校を卒

業して東京に出て来てしまったので、父の長崎でのその後の働きぶりは実は良く判らないのです。

大学受験のときは、私立でも良い、と言ってはくれたのですが、大分無理はあったようです。一橋に入って大分経ってから、お前が国立大学に入ってくれて良かったよ、と言っていたことがあります。父も常務なんて言うものの中小企業のサラリーマン重役ですから、苦しくもあつたのでしょうか。何せ当時は物価も安かつたので、学生時代の私は一ヶ月に一万五千元でやっていましたが、アルバイトと奨学金で一万円を自分で調達していましたので、家には五千円負担して貰っていました。この面では若干でも親孝行が出来たのだろうと思います。卒業の時は母ともども上京してくれて、あの時は父も嬉しそうでした。

金にはおよそ淡泊でした。仕事のみが先に立ち、自分の貰う分に文句をつけるなんてことはなかったのだろうと思います。社長になってからも業績が悪くなると、まず自分の給料を下げたり、賞与を返上したりするので、下の人が困ってしまって、もう少し社

長が沢山取ってくれないと下の分が少なくなって困る、なんて言っている、と言つことを聞いたことがあります。「人間、死ぬ時は畳一畳あれば良いのだ」と言つのが口癖で蓄財の感覚はまるでなく、住む家も最後まで社宅でした。病気になって退社するとき、退職金の一部として住んでいた家を貰うことにしたら、あと現金で貰う分はあまり残りませんでした。ですから亡くなっても遺産相続なんて面倒なことを心配する必要は全くなく、形見分けとか言つて兄弟が集まっても、出てくるのは古い万年筆（今書いているパーカーがそれなのですが）とかカフス・ボタンとかばかり。あれは私が貰う、これは誰だ、なんて言つてもたわいのないもので、「醜い相続争いだ」なんて面白がつてワイワイやる位のことでした。それでも残された母は軍人恩給とか年金でやって行けるようですから、良くしたものだと思います。（そう言えば、生命保険もありませんでしたっけ）

仕事の面では貿易、倉庫業界の九州地区の重鎮になって行き、夫々の業界の役員をやったり、県の役員をやったりしていました。昭和四十五年に黄綬褒章を頂き、五十一年

には瑞宝章を頂きました。瑞宝章の授賞が私のロンドンからの帰国と一緒に、帰国の日は母と二人で羽田まで出迎えてくれ、十一月九日に六本木の中華料理屋で内々の授賞祝いをやりました。考えてみるとこの辺が絶頂期だったと言つ事になりそうです。

本業の外では海難審判の審判長とか、海洋会長崎支部長とか、これは昔の船乗りの関係ですが、その他は母を通じての付き合いから来た公職も多かつたようです。PTAでも五人も子供がいるものですから、母なんかが何だかんだと役員をやらされ、そのつながらりでも父もPTAの会長などを仰せつかり、おまけに県の連合会長をやつた後、母が市の、父が県の教育委員を勤めるなんてことになつた時期がありました。ユネスコの長崎支部長もやっていました。これも母が支部創設以来の役員だつた関係上、いつか祭り上げられたと言つことらしい。ですからこうしたお役では実務は全部下の人に任せて、何かあつた時にまとめ役に廻るとか、対外的働きかけの役を受け持つとか、していたのでしよう。

捧誠会の支部長と言つのもやっていました。これは宗教と言つより修養団体で、前の

社長が熱心で支部長をやっていた関係上、前社長が亡くなったあと引き継いだものです。正月に出張してくると、池袋にある本部に一緒に行くのが年中行事でした。およそあんな場所、ああした団体にはそぐわない筈なのに、立场上、支部の会合で話をせねばならない、ということもあって総裁先生の話の聞いたり、事務局の人と打ち合わせをせねばならなかったのだと思います。最初は義理の付き合いたいな感じでしたが、後年は年のせいはずい分熱が入っていたようにも見えました。

五・晩年

私や慶がこちらで家庭を持つてからは、出張して来るとどちらかの家に泊まるのが常で、いずれも遠いところをよく来てくれました。駒沢にいた頃、喜美子が最初に倒れた時、助けてくれたのが父でした。丁度、出張で上京して来ていて泊まって、前夜は酒でも飲んだのですが、私が一足先に出かけ、出社したらすぐに電話。父も出かける支度をしていたら掃除をしていた喜美子が急に、眩暈がすると言って倒れた、との連絡に大急

ぎで帰りましたら父が付き添っていてくれました。出張中ですからその日何か予定があった筈なのに、私が戻るのを待って出て行きました。そう言えば、喜美子の病気が段々進んで行く頃、病院に行つていくら検査しても原因がわからない、なんて言っているときに「味が判らなくなつて来た」と言つのを聞いて、「これは面倒な病気かも知れないよ」と後でソツと耳打ちしてくれたのも父でした。

相模原に移つてからも、本当に遠くて閉口していたみたいですが、孫の顔を見るのが楽しみで来てくれていたのではないでしょうか。それでも晩年は流石にオツクウになつたのか、新橋の第一ホテルが定宿になっていました。出てきている期間中に一度か二度は、飲みに出よう、と言つことになります。最後に飲んだのが、五十四年一月九日、新橋の「一平」というおでん屋で義明が一緒でした。飲んで話している分にはいつもと同じで何ら変わった様子もなかったのですが、出るとき靴を履くのが苦しそうで、時間がかかったのが気になりました。その週末は相模原に来てくれたのですが、家に辿り着くまでに道を間違えて寒い中をウロウロした、と言っていたのが今考えてみるとオカシ

ナことでした。およそ間違えると言うことのない人で、キチツとしていました。誤字、当て字が大嫌いで、私が中学生の頃、姓名の姓の字の偏をウツカリ立心偏にしてしまい、大層叱られた憶えがあります。年を取ってもボケがありませんでしたから、道を間違えるなんて考えられなかったことなのです。脳の中の病気が大分進んでいたのかも知れませんが、後で聞くと、その前から大分兆候が現れていて、会社でも話題になりつつあった、とのことでした。

その晩は酒を飲み、少し寒いと言うので早めに寝て貰い、翌日はスツカリ元氣そうでしたので、羽田まで送ったのでした。倒れたのが二月十日。丁度、福井県三国に住んでいた父のすぐ下の仲良しの妹が（私の叔母）急逝した直後で、私は叔母が亡くなって丁度一週間後、雪の中をお参りに行って三国で父が倒れた知らせを受けたのでした。最初は脳血栓とか言うことでしたが、その後、脳腫瘍と言うことがわかり手術。それから二年半、闘病生活と言う事になったのですが、これは長崎任せ。幸か不幸か慶が一緒にいてくれたので、ずい分負担をかけました。同じ長崎に住む下の妹、福岡に勤めていた下

の弟もずい分力になってくれました。私は出来るだけ出張の機会を増やすことにして、時々見舞う程度でした。最後に会ったのが五十六年の五月末。もう危ない、と言う時期が続いたので、行って一晩泊り込みました。もう点滴で栄養を取りながら寝ているばかり、意識もありませんでしたが、二人きりでユックリとお別れが出来ました。これでスツカリ覚悟が出来ていましたので、亡くなった時も左程驚きませんでした。来るものが来た、と言う感じ。

出張を一日繰り上げて、六月七日の日曜日発で長崎に向かいました。着いたその足で病院へ行き、出来れば又一晩付き添いしようか、と気楽な気持ちで病室の戸を開けたら父の顔には白い布。輝子と豊明が茫然と付き添っていました。その日は朝から調子が悪く、夕方息を引き取ったとのこと。私が飛行機に乗っている間のことでした。臨終には間に合いませんでしたが、その後の後始末を全部手伝うことが出来て、今考え直しても良かったと思います。偶々出張の機会が作れ、こうした場合に遭遇できたのも何かの因縁ではなかったか、と思っっています。

戒名 徳隆院栄誉喜寿達道居士

取り敢えず上野の池之端、福成寺にある本家の墓に納めました。その後相談して長崎に移すことにし、この六月五日の三回忌の機に長崎の浄安寺に改葬することになります。戦後三十年以上長崎に住み着き、長崎が好きでしたから海の見下ろせる長崎の山に葬ってあげるのが一番良いのだと思っています。 (昭和五十八年四月二十九日)

母 富美のこと

母は昭和六十年十二月二十八日、七十四才で亡くなりました。母の想い出も数知れないが、亡くなった時に書いたものを披露する。

母の病

母が身体の不調を訴えたのは、昭和四十八年頃のことでした。その時は遊走腎ということだったのですが、尿に悪い細胞が出るということと、これがどこから出ているのか判らず、父が大変に心配していました。その後、本調子でないとは言いながらも普通の生活をしていました。国内旅行は度々だったし、喜美子の入院中の世話なんかも手伝いに来てくれました。普段は、調子が悪いとか、グズグズしているのに、子供（私のこと）が困ると元気を出して来てくれるので「女は弱し、されど母は強しだね」何て言っていました。秀逸はロンドン旅行。五十年夏、手術後で半身の不自由な喜美子と小学校四年と二年の子供と一緒に私が単身赴任していたロンドンまで出かけて来たのでした。老人と病人と子供という最悪の組み合わせですからハラハラのし通してましたが、一ヶ月のロンドンでの生活に加え、この間一週間かけてベルギーからドイツ、スイスからフランスとバス旅行をしたり、娘をボディーガードにロンドンの市中を歩き回ったり、オペラやバレエを見たりして楽しんでくれました。帰るまでシツカリしていて、帰国して間もなく又不調がぶり返したので、本当によいタイミングで決行したものだ、って良く思い返

したものです。私も前年の秋に日本を出るとき、一度はこんな機会を作ろう、とは思っていたものの、もう一年経ってこちらが少し慣れてから招ぼう、と考えていたのを急に繰り上げて赴任後の次ぎの夏にしたのでしたから、良い決断だったと言えるでしょう。良い思い出を作ることが出来た、って心から喜んでくれ、私もササヤカな親孝行が出来たと思っています。

旅行後間もない五十二年七月入院。膀胱に悪いものが出来ている、ということでも膀胱の一部を切除し、右の腎臓を摘出する手術をしました。その後は少し落ち着いていたようです。外出は減りましたが家の中では普通の生活。外の公的な仕事からは引退したので家の中の編物が楽しみになり、これは精力的に次から次ぎに良く作りました。北風の豪華な品物ですから注文が多く、一部は慶姉御をブローカーにして有償で分けてもいたようです。機械を使うわけでなく全部手編み、良く根気が続くものだ、と思うほどでした。

その後、検査を続けて膀胱内の腫瘍の進行が判ったものですから、大学病院からは早

めに手術することを勧められたのですが、日常自覚症状はないし、膀胱を取ってしまふと大変に不自由なことになると言うことで、ギリギリまで此の俣やってみよう、ということにしました。爆弾を抱えていることにはなるけれど、日常の生活には支障がなく元気でしたから。父が五十四年に倒れたときも頑張りました。自分が本調子でない中で入院中は毎日病院通い。ベッドの横の床に毛布を敷いて一日中編物をしているのでした。流石に最後まで自分で自分も入院。五十六年五月には膀胱ガンということで膀胱を半分切除。それでもその六月に父が亡くなったときは病院から出て来て何とか最後まで勤め、社葬にも出て最後まで見送ったのでした。

遂に五十九年七月、膀胱全摘出。ポータブルの人工膀胱を持って歩く生活に変わりりましたが、これはあまり長く続きませんでした。六十年七月、一緒に住んでいた祖母が亡くなったのが一つのショックみたいでした。九十五歳でしたから年に不足はない、とは言うものの、長い間一緒に暮らし、母よりも元氣なくらいでしたから精神的にもガツカリしたのではないでしょうか。親を看取って責任を果たし、ホツとしたのかも知れませ

ん。祖母の葬儀でも弱った身体を意地と責任感だけで保たせていたようでした。参列した皆さんからも、大分年を取った、元気がなくなつた、と言われたものです。この辺りからメッキリ弱つて行つたように思います。間もなく入院。腎臓に出来たガンというところがハッキリし、八月にはこれが肝臓から脊椎に転移していることが発見され、大学病院からは諦め宣言が出されたのでした。その後の入院生活、蓮見ワクチン投与の経緯は先日ご報告の通りです。

十二年の長きに亘るガンとの闘い。周りの一部は最初の頃から知らされていましたが、本人はどの程度感づいていたのか。でも、感付いていても周りに気を使わせないため知らないフリをしていた節もあります。喜美子のときといい、あの段階まで来た病人には一種の悟りがあるように思います。

それにしてもガンの恐ろしさを感じさせられます。亡くなる前々日、見舞いに飛び込んだとき、私の顔を見ての第一声が「最低なのヨー」。あの我慢強い母が言ったのですからよほど苦しかったのでしょう。あのひと言は忘れることが出来ません。

(昭和六十一年三月二日)

母の死

母がとうとう亡くなりました。十二年程前から腎臓の調子が悪く、手術三度、入退院は数知れず、と言う具合でした。四年前に父を送ったときも危なっかしかったのですが、一旦は元気になり、父の看病中に趣味の一つになった編物を楽しんだりしていました。この夏、祖母を送ってガツカリしたこともあったでしょうし、責任を果たした、という安堵感があつたのかも知れません。急に弱ったように思われます。この秋の入院のとき、大病院の先生に、もうイケナイから出来るだけ早く家に帰して、暫くでも外の空気を吸わせて上げなさい、と言われて帰ったのが十月二十五日。このときは全く酷い状態で、何日持つか、と言うくらい具合の悪さだったので、私も飛んで行ったのですが、家の空気が快かったのか、慶の丹精のお蔭か、メキメキ調子を取り戻し、食欲は出る、体重は増えると言った具合。家の中は歩き回る、病院の行き帰りには美味しいものを食べ

に行く、編物でも始めようか、と言つくらい元気になったのでした。

病院で、手の施しようがない、と言われたとき、誰かが蓮見ワクチンの存在を教えてくださいました。阿佐ヶ谷の北に珠光会という病院と言つか診療所があります。訪ねて行って、コンサルタントみたいな人の話を聞き、本を買って勉強しました。他でも調べてみると効いた人の例を聞くし、若し直らなくても、最後が楽になる、と言います。大学病院の先生に、打つ手がないならこれをやってみてくれ、と頼んだのですが、このワクチンは丸山ワクチンと同様、現在の医学界には認められていないのです。大学ではどうしてもやってくれない、と言います。この辺は現在の医療制度の頭の固さと言つか依怙地と言つか、イヤなところですよ。自分の方に手がないなら患者側が、やってみてくれ、と言っていることをやってくれても良さそうなものなのに。でも、ワクチンを作って貰うには血清を取る必要があるし、五日毎に注射を打たねばなりません。この治療に協力してくれる医者を探さねばならないのです。珠光会の方でも協力医のリストを持っているのですが、どういふ訳か長崎県はこの協力医の数が特に少ないのです。シーボルトの昔

から西洋医学が進んでいて、伝統的に医者組織が強いのか、と思いました。慶と二人で、一番懇意にしている医者に頼みに行ったら、意外にスンナリと協力してくれることになり、二人で「地獄に仏」とはこのこと、と大喜びしたことでした。退院後すぐ血清を作って貰い、これを氷で冷やしながら持ち帰って珠光会に持ち込み、三日後出来上がったワクチンを頂いてその足で長崎行き、と運び屋を二度勤めました。貧血の注射と言う事にして投薬開始。もういけない、と言われて退院してきてから四十日間も元気でいられたのは、このワクチンの所為ではないかと思っています。慶は大変でしたが、この四十日間は楽しかったようでした。とにかく病院でパツタリ止まった食欲が出て、何を食べても美味しい、と言うのが一番。スツカリ直るといふ自信すら持ったようでした。。。

十二月三日に再入院。ここで大体覚悟をしたのでした。正月に帰る、と言う名目でお別れに行こう、と大晦日の便を押さえていたのですが、様子を聞いているとどうも危なっかしいので、急遽予定を早めて二十六日に帰りました。早めて良かった。空港か

ら病院に直行したら、その日はまだ意識があつて少し話が出来ました。その晩から二日間病院で付きっ切りでしたが、最初の晩がつかつた。後で聞くと身体中にガンが廻つて、満足な臓器はなかつたとのことですから、苦しかつたでしょう。どこが痛い、というのでなく身体中が痛く苦しかつたに違いありません。それをこちらは何もすることが出来ず見ているだけ。背中をさすったり手を握ったりするのがどれほどの力になつたのか。医者には、原病は治りません、と宣告されていますから、やっていることは、出来るだけ楽にする、と言う对症療法のみ。直る見込みのない病人を見守っているつらさを一晩タツプリ味あわせられました。この晩は一人だったので一睡も出来ませんでした。この未明に意識が完全になくなり、付いている方は却つて楽になりました。これから困難な呼吸を一昼夜続け、各地から兄弟姉妹が全員揃うまで頑張つてくれて、十二月二十八日朝八時二十六分息を引き取りました。

兄弟姉妹五人、孫十三人全員が集まつて、その夜通夜、翌二十九日に葬儀を済ませました。

戒名 浄月院徳譽明照妙美大姉

早速各地から、電報やら電話やらお花やらお見舞いを頂き、どうもありがとござい
ました。馬場兄からの弔電が心の籠った良い電文だったので、告別式のとき一六〇通の
弔電の中から電文を披露した二通の中に入れさせて頂きました。

「明るい長島家の太陽が、地平線の彼方に没したことを心からお悔やみ申し上げます。
あの明るさと温かさがいつまでも残ることを念じてやみません。」

新年早々縁起でもない話題で申し訳ありませんが、こればかりは仕方ありません。

遂に行く 道とは予て 聞きしかど 昨日今日とは 思わざりけり

(昭和六十一年一月五日)

精霊流し

母の初盆に際し、精霊船を出した。私を総領に慶・輝の妹と義明・豊明の弟、五人の長島ファミリーの雰囲気が出ていると思われるので紹介する。

昨年暮、母が亡くなってすぐ、確か通夜の時だったと思いますが、兄弟姉妹集まって話している内に初盆の精霊流しはどんな趣向にしようか、という話になりました。

長崎では初盆というのは大変な行事なのです。お盆の三日間は毎日お墓参りをし、灯笼をともし、花火をして天国から帰って来る霊を歓迎します。三日目の八月十五日には西方へ帰る霊のために精霊船を仕立て、盛大な精霊流しで送り出すのです。お金持ちの当主が亡くなったたりすると、何十メートルもある大きな精霊船が出来て、これに提灯を何百個も飾り、揃いのはっぴ姿の若者が何十人も掛かってこれを押して町の中を練り歩

きます。町内で金を出し合つて船を作るところもあり、大きなものになるとこの船を作るだけで何百万円も掛かると言われます。昔は、鐘をカン・カンと叩き、担いでいる皆でドイ・ドイという掛け声で歩く、やはりシンミリしたものだつたのです。当時から花火は盛んでしたが、音の出るものよりきれいなもの。矢火矢といつて竹の棒に口ケツトみたいなものがついていて、火をつけるとヒュルヒュルと音を立てて中空に消えて行く花火が主流でしたが、これが又魂が天に還つて行くような、お盆にピツタリした感じの花火でした。こうして精霊流しというのはごく静かな行事だったので。夕暮れが近くなると街を囲む山のおちこちからカン・カンという鐘の音、ドイ・ドイという聞きよつによつては物悲しい掛け声が聞こえ、それが町の中心に向かつて近づいてきます。何千という船の数ですから、賑やかなことは大賑やかです。見物人の多い町の中心の広場では、威勢の良い若者達が酒の勢いで大きな船を勢いよく回して景気をつけたりしていたのですが、その程度のことでした。何時の頃からか、これが段々に派手になって来ました。豊かになって来たということか、花火も威勢の良いものが多くなり、爆竹

が中心になって、きれいというよりうるさくなり、その喧騒ぶりは想像を絶するものがあります。こうなると静かな敬虔な宗教行事のイメージはどこかへ行ってしまって、賑やかなことの好きな長崎人のお祭の一つになってしまっています。

大体、この精霊船の形というのは決まりきったものなのです。舳先に大きな飾りのみよしがつき、本体には提灯を下げる棚があり、どうかするとこれが二連も三連も繋がっています。昔はこれを担いだものですが、今は大型化したので下に車をつけて引っ張って行くようになっていきます。

通夜の晩の相談は、この船の形を決めようと言う訳ですが・・・、目立ち立ちたがり屋の多い兄弟のこと、何か変わったことをやろう、面白い形の船を考えよう、と言う訳です。昨年の祖母の時は、旅行が好きで九〇才を過ぎても東京と長崎の間を飛行機で往復していたことにちなんで飛行機を型どった船を作りました。これは小さかったけれど珍しい形だし、曾孫達が担いで可愛かったものですから人気があって、チラリとテレビに出たりしたのですが、今回も目立ってやろう、テレビ種になってやろうと言うわけで

す。宝塚が好きで、スミレの花が咲く頃、の歌が好きだった母。いつも物事を良い方向に良い方向に考えようと努力した母。最後までお姫様と言うかお嬢さまと言うか、娘っ気の抜けなかった母のこと、オトギ話で行こう、と言うことになり、シンデレラの力ボチャの馬車にしよう、と言うことはすぐに衆議一決しました。子供達にコビトの服装をさせてトンガリ帽子をかぶせよう、なんて、シンデレラにコビトが出てくる訳はないけど、そんな細かいことは気にしない気にしない。

こんな時にご下命を受けるのは福岡にいる一番下の弟の豊明。半年かけて夏までにシツカリ考える、と言う兄妹の命令に大分苦労したみたいです。外観のデザインを考え、車の構造の工夫。中々工夫が凝らしてあって、普段は台車をつけて子供達が押して行くのですが、シツカリした担い棒がついていて、イザと言うときには大人四人で担げるように作ってあります。これらを部品にして作っておいて、バラバラのまま車で長崎に運び、組み立てと飾りつけは知り合いの日大芸術科の学生と、一週間早く帰した達直が奮闘したとのこと。

私は当日の午後三時ごろ着いたのですが、船と言うか精霊馬車は、もうきれいに出来上がり、出発を待つばかりになっていました。カボチャの形をした馬車の中に四〇〇ワットの発電機を積んでありますから、その明るさは昼を欺かんばかり。その上、周りにクリスマス用の点滅電球をつけてチカチカやるのですから派手なことこの上なし。これなら目立つこと間違いありません。それでも製作費は人件費を除いて八万円ほどのことですから割安です。ユニフォームが用意してあつて、子供達は白シャツに短パンツ、大人の分はピンクのＴシャツに綿のトレーナーのズボン。いずれも揃いの豆絞りの手拭のハチマキ。女共は流石に黒装束。本来なら喪主は紋付八カマで、先導のチヨウチンを持つて先頭に立つのが決まりなのですが、お兄ちゃんだけ暑い目に遭わせるのは可哀想、と言うことになり、皆と一緒。その代わり子供達が押す馬車のリーダー役をやらされることになりました。総指揮者、精霊流し委員長は製作功労者の豊明。これには全員絶対服従の約束です。達直が副委員長。纏持ちが義明で、後は廻りの花火係りです。

出発のタイミングが大変なのです。クライマックスは県庁前広場と言って街の真ん中。

大勢の見物客が集まり、明かりも煌々としてテレビの撮影もやっています。ここに八時から九時の間に行くのが理想的なのです。ところが周りの山と言う山から船が出て来て、この一点に集まるのですから大変。この夜は三千隻からの船が出たそうですから、その混雑振りは都会の車のラッシュの比ではありません。下手をすると途中で動けなくなって、この中心地に着いたのが十二時過ぎになり、誰も見ている人がいなかった、なんてことになりかねません。ところがこちらは慣れたもの。五年前の父と喜美子のとき、昨年の祖母の時、と、自慢ではないけど経験を積んでいますから平気です。出発したのが三時半。私の着くのを待っていたように、食事もソコソコに着替えをしてすぐに曳き出しました。坂を下って街中へ。歌で有名な思案橋の近くまで行って、ここで三時間ほど待つのです。この間、お慶さんの顔の効くスナックの二階を貸り切って、オムスビを持ち込んで腹ごしらえ、喪主はお墓参り。あとは花火。

七時を過ぎ、夕闇が迫ってくると段々に船が集まってきて賑やかになって来ます。爆竹の音でうるさいこと。耳栓をしますから、耳元で大声で話しても判らないほど。当家

の花火係も最初はオソルオソル火をつけて、音の出る前に逃げ出すなんてことやっています。この頃になると大胆になって、大きな打ち上げ花火は手に持ったままだし、爆竹なんかも持ったままでバンバン鳴らすなんて平気でやるようになっていきます。家の分だけで花火代が五万円近くかかりました。長崎中では数億円の花火が消化されたそうです。

さて、頃は良し、と動き出し、坂を登って県庁坂上の中心部に丁度八時頃着くと、ライトで真昼の明るさ。黒山の人だかりの中を我がカボチャの精霊馬車はシズシズと進みます。珍しい形なので中々の人気です。カメラを持った人が出て来て、取り囲んでパシヤパシヤ、シャッターを切っています。長崎新聞の記者が取材に来ました。いくら大声で叫んで説明しても聞こえないものですから、妹の輝が記者のメモ帳をひたたくって関係者の名前からカボチャの由来まで書いたのだそうです。記者が明日の社会面で使わせて貰うかも知れませんが、なんて言っています。でも、これだけではつまらない、ここでもうひと暴れしないと気が済みません。昔はここで、大きな船を大廻しに廻して氣勢を

上げたものですが、大変に危険なので最近はそのが禁止されています。この日も機動隊が出ていて、「船廻しは禁止されています。廻さないで下さい」と呼びかけています。威勢の良いアンチャンの曳く前の船も静かに通り過ぎていきます。我が力ボチャ船はこう大人しくはありません。頂上の広場の中心に着いたとき、委員長の号令で子供の押し手がサツと大人の担ぎ手に代わります。担ぎ上げるや、「廻せっ」の命令一下、一回、二回、三回、機動隊が飛んで来る前にピタリと止めて、又動き出しました。(船が小さいから大目に見てくれたのでしようが)大成功。あとは坂を下って解体場へ持って行き、波止場で始末してこの夜のお祭は終わりました。

その後は、件のスナックに戻って打ち上げ。行進の途中でドンドン応援が増えて、大集団になりました。十五畳くらいの二階に子供を入れて三十八人も人が入ったので暑いことまるで蒸し風呂。それでもその中で一通りの挨拶。お慶村長から、功労者への表彰授与。カラオケも一巡させてオヒラキということになりました。

家に帰り着いたのが十二時過ぎ。この日は民放が特別に一時から精霊流しを放映する

ので皆で見よう、と言う訳。カボチャの船は製作中から出て来ます。本番では大きい立派なもの、有名な方のものに混じって、我がカボチャの馬車はかなり長く放映されました。ヤッタ、ヤッタと大喜びで寝たのが二時。

翌朝は、六時には弟の声で起こされました。弟は新聞の配達を待って、暗い内から門の前でウロウロしていたらしいのです。新聞少年から朝刊を受け取って開いてみたら、あった、アッタ。大きく紙面を割いてカボチャ馬車の写真入の記事が出ているではありませんか。記事をご紹介します。華やかなことの好きだった母を送るのにふさわしい成功でした。きつと母も喜んでくれるでしょう。良い供養が出来ました。

これだけ大成功だったものですから、又やりたいね、なんて物騒なことを言う人が出て来ます。「アイデアと Know how を売ろうか」なんて言っている間までは良かったのですが「今度はお兄ちゃんの番だ」に始まり、「ナオ君がリーダー役になるのだから、やり方を良く覚えておきなさい」なんて酷い話になります。「お兄ちゃんの時は、修繕船だからポロポロの船を造れば良い」なんて、とうとう船の形まで決められてしまいま

した。やっと、「この次は三〇年位先かしらね」と言ってくれた人がいたのがせめても
の救いでした。

(長崎新聞 一九八六年八月十六日付)

(昭和六十一年九月十五日)

小学校・中学校・高校のこと

小学校は、代々木の山谷小学校に入学したが、二年の五月に戦災に遭って大村に疎開し、大村の女子師範付属小学校に転校、五年で長崎の市立勝山小学校に転校して昭和二十五年に卒業した。長崎市立長崎中学校に進み、昭和二十八年に卒業、その後、長崎県立長崎東高校に進んで、昭和三十一年に卒業した。この間、曲がりなりにも優等生と言われる学生生活を送り、高校卒業時には四百四十二名の卒業生を代表して卒業証書を頂く総代を勤めた。小学校と中学校については、恩師への手紙二通を引用してみる。

拝啓 菅藤 恒保先生

菅藤先生というのは、小生の小学校の頃の先生。東京の家を焼け出されて大村に疎開し、大村女子師範付属小学校に転入した時の担任の先生である。担当だったのは一年足らずだったのではないだろうか。小学校時代の先生方とはその後文通もしていないが、菅藤先生とは年賀状程度ではあるが毎年消息のヤリトリをしていた。その後先生は長崎に出て来られ、教育委員の仕事をされたりしていたが、小学校の校長を最後に今年退任されると言う。小生、丁度小学生を持つ身になり、考えていたこともあったので、ご挨拶状の返事を、と思って書き始めたら思いがけず長々と書いてしまった。今月は一寸サボって、最近考えていることの一端を紹介する意味で先生宛返信の全文をそのまま発表することにした。書き直す積りでいたが、ゼロックスなる文明の利器があるのを思い出し、手紙のままにした点もご容赦願いたい。

その後はスッキリご無沙汰続きで申し訳ありません。今年は冬と春の間が長く、寒い

日と暖かい日が交互に来て、所謂氣候不順が続きましたが、四月も終わりになり、すっかり暖かくなりました。

ご退任のご挨拶状 頂きました。長い間ご苦労さまでした。四十一年間の教職生活、一口で申されませんが大変なことであつたと思います。

小生、丁度上の娘を今年小学校に上げました。この機会に、とこれまで住み慣れた世田谷の社宅を引き払い、相模原に小さな自宅を構えたのですが、田舎に移るに当り私の大村時代を思い出さずにはいられませんでした。幼稚園で出来た大勢の友達と別れさせ、72一人新しい環境に飛び込ませることに若干のためらいを禁じ得なかつたのです。私が東京の家を焼け出され、大村に参つて先生の学校に入りましたのは二十年の六月頃の筈です。から二年生の成り立て。髪がモジャモジャで身体の大きな、声の大きな怖そうな先生だ、と思つたのを覚えています。見知らぬ土地で友達もいなくて心細いところへ持つて来て、あの頃は都会っ子に対する反発が強かつたのか、ずい分いじめられました。こちらにも意気地なしたつたのでしようが、泣かされて帰る日が続き、それでも家に涙を持つ

て帰って、母親を心配させまい、と門の外で懸命に嗚咽を抑えて二つ違いの妹に慰められたりしました。あの頃のガキ大将だった岩永君、村田君なんか今頃どうしているでしょう。当時の同級生でその後を知っているのは、慶応から三井不動産に入っている似田君、防衛大学に入った内田君位のもの、後は一別以来会う機会もありません。今では当時どんな気持で通学していたのか覚えていませんが、かなりつらい思いをしていたのではないのでしょうか。自分の子供にはそんな気持を味わわせたくないと思い、途中での転校を避け、上の娘の入学、下の息子の幼稚園入園の機会を捕らえて転居してみました。友達が幸い両方とも心配はないように毎日楽しみに通学・通園してくれているようですし、友達もドンドン増えているようです。

戦時中のこととてランドセルもなく、母の手製の背嚢を背負い、教科書も上級生のお古だったり、ザラ紙のバラバラのものを糸で綴じたりしたのを覚えています。通学もずい分遠かったように思います。ニキ口はタツプリアったのではないかと思えます。雨が降ると貴重な靴を濡らすのが勿体なくて、靴を脱ぎ素足で歩きました。これに比べると

最近の子供は恵まれたもので、買おうと思えばランドセル、机、学用品などきれいなものが何でもあります。教材にしても算数の勉強用セットとか、工作用具とか、きれいに用意されています。教科書もノートも画用紙も豊富で、ずい分贅沢に使います。あの頃は画用紙なんてあつたかどうか判りませんが、とにかく白い紙を一枚使おうと思つたら何だか大変なことで、一大決心が要つたように思います。習字用半紙の代わりが新聞紙でそれも真つ黒になるまで繰り返し繰り返し書いたものでした。

先生のお立場でどうお感じか判りませんが、こうも環境が整備されてしまうと本人の苦勞がなさ過ぎて、意気込みとか、ものを大切にする精神とか、何かを工夫して作り出す喜びと言つたようなものが薄くなるのではないか、と思われてなりません。今は環境が環境ですから、ある程度のこととしてはしてやらないと子供が肩身の狭い思いをするのではないか、と思いますので、最小限の付き合いはしていますが、少なくとも贅沢な思いはさせまいと思っています。

父兄として学校に何を望むか、を書かされたとき、素直で明るい子に育てると共に、

学ぶ喜びを教えて欲しい、と書きました。大村・長崎で貧しい教材の中ではありましたが、何か新しいことを知る喜びは教えていただいたような気がします。十五年以上前になりますが、高校を出て東京へ出て参り、家庭教師としてこちらの家庭に入って行く機会がありました。都会の子供は可哀想だ、とつくづく感じたことでした。学校にしろ学習塾にしろ家庭教師にしろ、いわゆる詰め込み主義で、学ぶ喜びなんてものではありません。小さい時からこれでは苦痛の連続で、早くこつこつしたものをから逃れたい、とは思っても、積極的に新しいことを知ろう、とは思わないのではないのでしょうか。これでは学校を出てしまつたらホツとして、これから学ぼう、なんて気持なんか出てこないと思います。自分の子供には少しでもこつこつしたストレスは与えず、何時までも学ぶ喜びを持って貰いたいと思っています。私の家では小さい時から、勉強しろ、勉強しろと強制された記憶はありません。夏休みの宿題を残して大変に叱られたことがあります。これは約束を違えたという意味で叱られたのだと思います。ですから私の子供にも決して強制はしないで自分で勉強することの面白さを教え、欲の出るのを待つて厭々机に向か

うようなことのないような、そんな気持ちにさせたいと思います。ガミガミ言っ
て家庭教師をつけたり、学習塾に通わせたりすると、学習が強制になり、試験勉強は上手くなっ
ても本当の意味の勉強の面白さは身につかないのではないか、と思います。

子供を持ってみて、教育の難しさ、恐ろしさを身に沁みて感じます。自分自身、まだ
本当に何が正しいのか判らないところが多いと言つのに、子供にはことの正否を教えて
行かねばならず、又、こちらの言つことは無批判に正しいと思つているようですから。
おまけに、どう言つ風に教育するのが一番効果的で押し付けでなく身に付くのか、を考
えなければならぬのですから。少なくとも叱る時は感情でなく理性で叱りたい。怒る
のでなく叱りたい、と心掛けている積りです。中々上手く行きませんが・・。先般、教
育と言つ問題につき、親父と話したことがありますが、こう言つ問題を真剣に考える
こと自体が大切なことで、子供にも良い影響を与えるのではないか、という意味のこと
を言われ、多少救われたような気がしました。

小生、通勤に時間がかかるので、今日も遅く帰宅し、子供は寝てしまつているので、

一人で遅い夕食をしながら一日のことをワイフから聞いていました。今日は、上の娘が楽しみにしていたピアノが届いたとのことで、我が家にとつては大事件だったので、弟がまず自分のことのように喜んで、お姉ちゃんおめでとう、とやったとのこと。その後、姉の方が何かの拍子に、皆が寝ている間はうるさいだろうから弾かない、と言っていたとのこと。この二つを聞いて本当に嬉しく思いました。他人に対する思いやりの気持を二人とも間違いなく持つてくれているということ。少なくともこの面では間違つた教育はしていなかつたのだ、と感じたからです。明日起きて来たら何と言つて褒めてやろう、どう言う言い方をするのが一番印象的で本当に良いことをしたのだ、と思わせることが出来るだろうか、と楽しいことを考えながらビールを飲んだことでした。

何だかまとまりのないことを長々と書きましてご迷惑だつたと思いますが、先生のご挨拶状を、小生自身、親として教育と言つ問題を否応なしに考えさせられているこの頃頂戴致し、何か感じることはありませんので思わず長くなってしまいました。乱筆、乱文ご勘弁下さい。

末筆ながら、今後のご健勝を心からお祈り申し上げます。

昭和四十七年四月二十八日

柔道事始

中学のときの体操の先生からヒョッコリ葉書が来た。中学を卒業して、もう二〇年。年賀状のヤリトリ位しかしていなかったのに、何かと思つて読むと、当時の校長先生の叙勲の祝賀会があり、先生方が集まつたときに、思い出話の中に僕のことも話題になり、思い出して便りを下さつたとのこと。先生とは有り難いものだと思う。毎年、何百人と言つ生徒を送り迎えしているのに、二〇年も前の生徒のことを、どうしているか、と心に掛けて下さっているのだろうか。返事を書いたら僕の柔道の初試合のことが中心になったので、このままご紹介することにした。こんな思い出はどこかに残しておきたい。

暑い日が続きますが、先生には相変わらずお元気のご様子、何よりに存じます。

お便りどうもありがとございました。長崎中学を卒業してもう二〇年にもなろうと言いますのに、懐かしい小宅先生、元村先生、竹島先生、道田先生方の間で思い出して下さり、お便りを頂けるなんて、本当に嬉しく光栄に思いました。勿論、私の方から言えば、恩師のお一人お一人は忘れようにも忘れられぬ方ばかりですが、先生方に見れば毎年毎年何百人と言う生徒に接していられるわけですから、その一人一人にまではとも気にかけていられないのではないか、と思っております。あらためて、先生とは有り難く、大変なものだと考えさせられたことでした。

先生のご記憶通り、淵中は忘れもしない私の柔道の初試合の場所です。戦後、禁止されていた武道が解禁になり、長中でも凶工室の片隅に畳を敷いて二・三人で稽古してられる先輩を見て、白い柔道着が清潔でやってみたいと思い、父に相談したら、お前は足が遅いから運動やるのなら柔道でもやるか、と言うことになり、始めたのが柔道との馴れ初めでした。先生のご指導で始めた同級生は酒井君（長中から商船学校に進んだはずですが、後どうしていますかしら）が飛びぬけて強く、あと吉原（現在、大阪屋

証券の課長で東京在住。同じ同期の柴原純一郎等と一緒に時々会っています。古館、原田なんてヒョロヒョロしたのがいました。淵中での試合は、稽古を始めて三・四ヶ月目ではなかったでしょうか。やっと受身が出来るようになった頃で、考えてみれば先生もずい分思い切ったことをなさったものでした。吉原が先鋒、私が次鋒、大将が酒井君で、中堅と副将が二年生だったように記憶します。私の戦績は確か二勝二敗。投げ技なんか決まるわけはなく、ただ走り回って引き倒して押さえつける位が関の山。勝ったのは二つとも先生じこみの袈裟固め、と言うとカツコウが良いのですが、とにかく相手の首にかじりついて押さえ込んでいた、と言うのが本当でしょう。負けたのは一つが判定でしたが、もう一つの負けが、物凄い勢いの釣り込み腰で、相手は桜馬場中の斎藤と言う男でした。東高に入ってから暫く一緒にやりましたが、最初の印象が強烈で、いつまで経ってもコンプレックスが抜けなかったものです。ということで勝ち点二〇、負け点十八で、二点ほどチームに貢献したように記憶しています。その後の試合の記憶は殆どありません。最初の試合と言うことで相当印象が強かったのだと思います。このときも体

の大きい奴を押さえつけて勝ちましたし、その後も柔道は大学を卒業するまでかなり熱心にやりましたが、試合ではめったに自分より小さい奴とやる機会がないものですからお蔭で小さい身体ながら大きい奴が少しも怖くなくなり、試合ではむしろ大きい奴の方がやり易いなんてことになりました。身体に気押されしない気持は柔道で教わったと思っ
ています。これは柔道に限らず仕事についても言えることで、外人との付き合いが多いのですが、少々大きい奴が出て来て大きな声を出しても平気でいられるのは、身体に
対するコンプレックスがないのが一つの理由ではないかと思っています。

先日、出張で久し振りに長崎へ参りましたら、長中の跡に何か立派な建物が建っており、公民館か何か、とのこと。長中は西山の市民グラウンドのところへ移転したと聞き
ました。市民グラウンドと言えば、長中はグラウンドがないので、運動会と言うとテントなど
を山の上まで運んだものでしたね。あの頃は歩いて登るしかなかったもので、一日に何度
も重い荷物を抱えて往復するのが大変でしたが、先日は山の上の方まで自動車道がつい
ているのを発見し、楽になったものだ、と思ったことでした。

三菱重工に入社してもう十四年目。相変わらず船関係の仕事をしていますので、時々長崎へも出張するのですが、出張のときは何かと忙しく、バタバタと帰ってきてしまいます。この夏は、三年振りに一週間ほど休暇をとり、家族連れで帰省することになっています。是非一度事務所の方へお訪ねしたいと思っております。

あの頃の同期生で連絡が取れる連中がいますでしょうか。東京でも東高の同期会はやっています。東高のあの年の卒業生が四百四十人ですが、三・四年前から少しづつ探して行きましたら、今はもう五十人以上になり、年に二度例会をしますが、三・四十人も集まり、盛会です。長中の同期会みたいなものもやってみたら面白いのではないかと思っております。

では、近い内にお目にかかれるのを楽しみにしています。暑さの折、ご自愛ください。

松尾 駿一先生

(昭和四十八年八月四日)

一橋大学

昭和三十一年、単身上京して一橋大学に入学、大学では経済学部へ属し、国際経済学の赤松要教授のゼミに加えて頂き、退官直前の先生の最後のゼミテンの一人になったが、学問に打ち込んだ、と言うより、四年間自由な時間を買った、という感覚の方が強く、一生懸命柔道をやったと言う印象の方が強い。一橋を選んだ理由に触れた一文と、柔道部で学んだことを書いたもの二文を紹介する。

君は何故一橋大学の経済学部を選んだの？

御殿場での英語合宿のインストラクター（講師）のチーフが東海大学教授の松本薫と言つ人だった。この人は東大を出てからオックスフォードで勉強し、更にドイツ、フランスで磨きを掛けたと言つ政治科学専攻の先生で、東大、早大の教授を経て今はもう七十二才。東海大学の教授をしながら悠悠自適という感じの面白いお爺さんだったが、この先生の授業の中で、君は何故君の大学を選び、それも何故その学科（FACULTYと言つ）を選んだのか、と言つのがテーマになつたことがあつた。

技術屋が多いので、そいつらからはかなり積極的な回答が出てくるかと思つたが、意外にそうでもない。東大の造船科を出た奴でも、船が好きだつたから、と言つのではなく、東大の教養学部で二年やつたら成績により専攻科目を選ぶ権利が出来るとのことで、最も優秀なグループが何を専攻できたのかは忘れたが、自分の成績が造船科位に適當だつたから、といった程度。機械を出た奴も、あれも面白くなさそう、これもどうも、と消して行つたら、最後に機械が残つたと言つことで消去法による選択。一人だけ化学を出た奴で、化学工業に興味があり京大に入って迷わず化学を選んだ、と言つ奴がいた。

技術屋にしてそうである。自分の番に廻ってきたらどう答えようか、と困っていた。

何しろ僕の場合、小さい頃から船が好きでこれは父親譲り。高校二年の頃まで商船学校に行く積りだったが、親父に説得されて諦めたことは何時だったか紹介したと思う。とにかく長崎に寄港する日本郵船、三菱海運の船長連中（親父のクラスメート）を連れてきては、僕を側に座らせ、船長稼業が如何に大変かを教育してくれるのだから迫力がある。ということとで商船大を諦めたのだから、工業大学にでも行けば筋が通るのだが、一橋を選んだ理由の一つが、受験のとき理科の科目が一つ少なかったと言う単純なものだったように思う。勿論、東大、東大という万能主義に対する反発があったことは事実である。

そこで東大に対する反発から始めることにする。いつになっても自分は出来る範囲で美化したいもの。東大出のその先生は複雑な顔をしていたが、判るような気がする、とも言っていた。

で、どうして経済学部を選んだの（勿論、全部英語ですよ）と問われてハタと困って

しまった。どうにも積極的な理由がない。良いと思つたから、なんてのはあまりカッコ良くないし、理由にもならない。考えてみると入学試験のときに既に学部を決めさせられていたのだつた。選択もクソもあつたものではない。遂に消去法と言ふ事になる。法学部と言ふのは勉強する奴の集まるどころ。自分は怠け者で法律の勉強、法令の暗記なんてしたくなかつたので外した。商学部というとあまりにも実務的な感じで、アカデミックな感じがしなかつたので止めた。社会学部は（当時、社会学部が何であるかを知つていたら、これを選んだかも知れないと思いつつ）哲学だ、歴史だ、政治だとあまり興味になかつた、と言つたら、その先生は文学から入つて政治に進んだ人であり賛成しなくなさそうな顔をしていた。そうすると残るのは経済ということになる。話している内に何だか情けなくなつて来た。勉強が嫌いで経済学部を選んだみたいなことになる。じゃ、何故大学に入つたの、なんて質問が出てきたらどうしよう、と思つたので、こちらから先手を打つて、若し勉強が好きで語学にでも身を入れていたら、会社に入つてからこんなところに来て勉強しないで済んだらうに、と結論付けることにした。

このところ茂木兄から大学制度に対する警鐘が鳴らされている。振り返って自分を考えると、学生時代は、とにかく四年間自由な時間を貰ったのだから、何かに有意義に使えば良い、と思っていた節がある。貴重な友達は出来た。何か一通り齧って、人と話が合わせられる程度に本も読んだ。でも、これなら誰にも負けぬ、大学の教授とでも一発論議をしてみるか、といったドツシリしたものは何も無い。経済学部を出て勉強したことがどこに役立っているだろう。どうやらあまり良い卒業生ではないようだぞ、と言つ気になる。大学を学問の場にする一番手っ取り早い方法は同兄の意見にもあるように、入るを易くしても出るを難くすることだと思つ。一年に一〇%なんて生ぬるいことを言わず、三〇%位落第させたら良い。少なくとも入学したときは向学の意欲に燃えていた筈。これを消さないで四年間持続させることだ。勿論、運動は必要。青白きインテリを作るのが目的ではない。若し、優等生みたいなものがあるとしたら、文武両道に秀でたものを選ぶ、位のことにはしたい。学問と運動が両立できぬわけではない。ナナツトセ ナンニモシラズニ ソツギヨウシ ヨニデテハジカク 生 であつて欲しくない、と

いじつと。

(昭和四十八年七月八日)

何ものかをつかめ

「何ものかをつかめ」柴山師範は口ぐせのように言われた。二十年前の我々には、その「何ものか」が何であるか、見当もつかなかった。何ものか、を探すより、自分自身で手一杯の悩みを持っていたように思う。恵まれない体力の自分を、どうしたら少しでも強くすることが出来るか、どうしたら相手を圧倒するようなムキ出しの闘争心を養うことが出来るのか、試合場が上がって行くときの重い重圧感をはね返すだけの精神力を鍛えるには、どうしたら良いのか。

四年間の柔道部生活が私に与えてくれたものは多い。大抵のことなら泣きを入れないでいられるのは、毎日の稽古のつらさを通じて得たものである。大勢の先輩や応援団を前に、重い責任を背負って試合場になった一人で上がって行くときの、身の引き締まるような、逃げ出したくなるような重圧感をはねのける気持は、客とのつらい交渉に出

て行くときの気持ちと似通っている。もつと原始的には、身体の大いい人に対する気後れがなくなっていること。自分が身体に恵まれず、試合の相手が自分より大きな男ばかりだったせいだろう。社会人になってから、外国人と接する機会が多かった最初の頃は良く感じたものだ。

昭和三十五年卒の我々はあまり強い年代ではなかった。三年のときこそ三商大戦優勝の手伝いをさせてもらったが、我々の年は神戸に負けて二位。神戸の道場で、皆で口惜泣きして「子供じゃあるまいし」と先輩に叱られたのが、強烈な思い出として残っている程度である。

その代わり、最後まで汗まみれになった仲間との結びつきは、どの年代にも負けない積りでいる。非力なだけに助け合いの気持が強かったのだろうか。弱將の私を支えてやるう、という同期の皆の思いやりだったろうか。月に一度夫々何か物を書いて消息を交換し合う場を作るう、と仲間と語らってはじめて同人誌「珊瑚」はもう百三十号を超える。交代でつとめている編集役がようやく一巡したところだが、これから三巡も四巡も

させる積りでいる。

この間、五十一年には岡崎信夫、五十二年には渡辺雅司、とかげがえのない二人の間を失った。岡崎は試合でも抜き役、表の引つ張り役だったし、渡辺は、冷静沈着、陰の支え役だった。二人のためには柔友会先輩・後輩にも加わっていただき、追悼文集を出させていただいた。

こうして考えて来ると、柔道部生活を通じて得たものの中で一番大きなものは、こうした先輩・同僚・後輩のつながりを通じて得たものではないかと思う。そこには他の大90学でも、他の運動部でも得られなかった「何ものか」がある。「何ものか」というのは、別に一つの目標である必要もなく、「これが何ものかである」と示せるものである必要もない。一人一人が一橋大学の柔道部で生活しなければ得られなかったものを何かつかむこと、これが柴山師範の言われた「何ものか」だったのだらうと思う。

自分自身、学生時代はあまり良い学究とは言えなかったと思う。どう考えても、学問に身を入れた、と言うのは難しい。その辺の反省もあって、学校を出て間もない頃、「君

は一橋のどこを出たのか」と聞かれたとき、「経済学部」とか「赤松ゼミ」と答えるのが面映くて、「柔道部を出ました」と答えることにしていた。でも、二十年経った今、そうした一種の後ろめたさとか、反省などを感じないで、胸を張って「一橋大学の柔道部を卒業しました」と言える。そう言えるだけの「何ものか」があつて今の自分を支えてくれていると思う。

(昭和三十五年経済各部卒)

(一橋大学柔道部八十年史 昭和五十八年五月発行)

故岡崎 信夫と故渡辺 雅司

柴山語録といえは、「何ものかを掴め」「絞め、参ったなし」を思い出すのは私ばかりではないだろう。「何ものかを掴め」については二〇年前に「八十年史」に書いたので、今回は「参ったなし」について書いてみよう。

現役の頃の「参ったなし」は、つらえばかりのものであった。あの筋肉の固まりの固

いお腹に押さえつけられ、首に手が行くともう逃げられない。主将の身でありながら、寝過ごして寒稽古に遅刻し、その罰だと思うが、道場の真ん中で実際に落とされてしまったこともあった。それでもこうした厳しい稽古を重ねて行くにつれて、苦しくても最後まで諦めずに頑張ろう、と言う精神は鍛え上げられたと思う。社会に出ても、大抵のことには音を上げないで頑張つて来られたのは、「参ったなし」の稽古のお蔭だと思う。

我々三十五年卒の同期は、岡崎信夫を昭和五十一年七月に、続いて昭和五十二年六月に渡辺雅司を亡くしている。岡崎は現役時代から非力ながら苦勞を厭わない頑張り屋で、稽古中に右腕を骨折したにもかかわらず、直つて出て来たら左技を研究し、左の釣り込み腰をものにして、見事抜き役に成長した程であった。三菱商事に入社後は化学品部やカナダの駐在員として活躍し、更なる活躍が期待される中、売薬の薬物中毒のため三十九歳で亡くなった。渡辺は親父さんとお兄さんが柔道家だったこともあり、冷静で安定した柔道を身上とし、試合ではどんな強敵に当たっても安心して分け役を任せられる存

在だった。大日本印刷に入社したが、もっぱら総務畑で環境問題や組合問題・労務管理を中心に活躍し、その上自分の身体を犠牲にしても、スポーツで社員の心を一つにしよ
う、と努力を重ねていた。若くして京都事業部の総務課長の激職にあつたが、脳血栓の
ため四十三歳での夭折であつた。

この二つの不幸は、事故としか言いようのないものであつたが、柴山師範は自分にも
責任のあることと感じておられたのではないかと思う。同期の集まりに出て頂く機会が
多かつたが、日本人に対する愛情、柔道に対する愛情や将来への懸念などを熱を込めて
話された後で、身体を大事にしてくれよ、と言われるのが常であつた。自分が過度の精
神論を叩き込んだ所為で、この二人が頑張り過ぎたのではないか、と言う自戒の念をど
こかに持っていていられたのではないだろうか。「爾後、三十五年卒は自分より早く死ぬこ
とを禁ずる」なんて言われたこともあつた。

そのせいか同期の集まりにも良く出席して頂いた。我々同期は、家族ぐるみの付き合い合
いを大切にしているが、この家族会にも喜んで出席して下さいました。子供たちがまだ小さ

かつた頃、元の如水会館で故岡崎のお父さんや私の父と一緒に来ていただいたことがある。子供達の相手をして幼いゲームに付き合つて下さつた。皆でフォークダンスを踊ろうと言うことになり、師範もフォークダンスの輪の中に入って貰つた。師範にフォークダンスを踊らせたのは、我々のグループだけではないだろうか。その後、不自由な身体になられてからも、急なお誘いだったにも拘わらず、箱根での集まりに参加して頂いたこともあつた。

ここ十年ほどは、野口 健彦が音頭を取つて、三十六年組と一緒に年に一度、師範を囲む会をやつてくれていた。私自身は長崎に来てしまい、この会に出席する機会はなかつた。昨年、会社を離れて自由の身となり、これからは出来る限り出席しよう、と思つていた矢先に師範の訃報に接し、残念と言う気持と申し訳ないと言う気持とが半々の複雑な心境にある。柴山師範のご冥福を祈ります。

合掌

(平成十四年七月)

(柴山謙治師範追悼録に寄稿)

家族のこと

昭和三十九年、三菱重工業の職場で知り合った加藤喜美子と結婚、四十年十二月に長女 美貴、四十二年十月に長男 達直が誕生したが、この結婚生活は、喜美子が四十五年に発病した脳腫瘍との闘いだつた。五十六年四月四日に喜美子が亡くなり、その後、暫く独身生活を続けたが、六十一年に河野恵子と再婚した。

姉弟五態

子供のやることを見ていて、姉弟でこつとも違つものか、と面白く思うことが多い。描

く絵にしても姉は人形ばかり、弟は怪獣ばかり。くつついて遊んでいても今のところは姉の方が圧倒的に主導権を握る。性格的にも大分強い。ベソベソするのは弟の方である。人懐っこいのは同じだが、弟の方はベタベタ、姉の方は少し分別とテレがある。これは年のせいなのだろう。

一・雷がなると達直が外から顔色を変えて飛び込んでくる。オヘソを固く押さえて半ベソである。美貴は少しゆっくりと姉さんらしく、それでも後から帰ってくる。怖いのは同じだが、貫禄を見せねばならない。「雷なんてメイシンよ」と姉。「メイシンってナーニ」と弟。「メイシンってウソのことさ」。遊園地のお化け屋敷に入る。怖がって顔を覆ってしまうのは達直。美貴の方はブンブンに怒って出て来る。お化けなんて中に人が入っているのよ、と言いながら怖いのが、自分で腹立たしいらしい。現実派と情緒派。

二・夜、ベッドに入れてから美貴が急に泣き出す。又、何か我が侘を言っているのか、と思って、こちらは少し大きな声を出す。聞いてみると、大人になるのが嫌だ、

と言う。これが悲しいのだ、と言う。こちらは何とも慰めようがない。まず、大きな声を出したことを後悔し、次に、これは両親に責任があるのではないかと反省する。あまりに魅力のない両親なので、愛想を尽かしているのかしら、と心配になる。達直が泣くのは昼間遊びすぎたとき。足が痛いと言って泣く。これはサロンパスで解決する。もう女の子のオセンチが始まったのだらうか。

三・二人とも出かけるのは好きである。これは母親譲りか、長島家の血統か。でも車が好きなのは弟の方。大きくなったらスポーツ・カーを買って、パパとママを好きなところへ連れて行ってくれるそうである。「どこへ連れて行ってくれるの」「遊園地」。姉の方が運動神経が発達していて、運転くらいやりそうな気がするが、運転はイヤだとのこと。ブツカツたりするのが怖いとのこと。これは男の子と女の子。

四・幼稚園に弁当を持たせる。必ず、美味しかった、と言って空になった弁当箱を誇らしげに母親に見せるのは弟の方だとのこと。姉の方は同じ年代、チットモ美味

しくなかった、とあまり嬉しそうな顔をしなかった、と言う。好き嫌いは弟の方
に多く、姉の方は何でも食べる。特に栄養になりそうなものが好物で、チーズ、
レバー、セロリなど子供が敬遠しそうなものも良く食べるのに感心する。素直と
ヒネクレではないと思う。表現の相違と理解している。

五・弟の方は今もってマスコットの熊を抱いて寝る。こちらがテレビを見ていると、
膝に乗りたがる。何でもないので、抱っこ、なんてやっている。姉の方は、強が
っているのか、卒業したのか、大分前からベタバタしない。二人姉弟でも未っ子
と言うのが存在するのか、と思う。

(昭和四十七年九月十六日)

プライベート

この何ヶ月間か、泣き言は言いたくないが、本当に疲れた。病人の心配が一つ。医者
との関係、周囲の心配してくれる人たちとの関係、子供を含めて家のこと。最後に仕事
の事。

十年間の会社生活で、慣れているとは言え会社は仕事の場。楽には行かない。年中神経をピリピリ尖らせている。尖らせていることに慣れていから意識はしないが、一日の勤めはやはり疲れる。入院中は朝三十分から一時間早目に出勤、その代わり夕方五時には退社することにした。五時に出て立川まで一時間、病院へ行く。病人の顔色を見、付き添いの小母さんの話を聞く。時には医者と相談する。二時間足らずで出て来て、駒沢まで一時間、帰って数ヶ所に電話で報告。風呂に入って食事すれば、後は寝るだけ。テレビを見る元気もないほどだった。

朝早く出かけて夜は遅くなるので、子供と話し合う機会もない。母親がいなくて淋しいだろうと思うと、偶の休みも子供に付き合う必要があると思う。自分の時間が全くなかった。自分の時間と言えば、病院への行き帰りの電車の中だけ。本は持って歩いたが落ち着けはしない。疲れで眠くなったりする。

何とか自分の時間が欲しい、と思った。十一月七日の土曜日。会社の連中は部の旅行、と言うことで皆出て行ってしまった。静かになった事務所で一時間ほど文集のコピー作

り。十一月号は駆け込みが多く、一人分、二人分と小刻みに何度もやらされた。

二時過ぎ、上気丸の内に出てくる。丸ビルの本屋で二冊ほど本を買う。今日は病院行きはサボろう。渋谷まで戻って来て、五五〇円払ってロードショウの映画館に入る。次の開演まで一時間ほどある。紙コップにコーヒーを一杯買って来て、ロビーのクッションの効いた椅子に深々と腰をかける。煙草でも一服やりたい気持である。丸いコーヒーカップみたいな椅子で、中々座り心地が良い。自分の書齋を持ったらこんな椅子を買おう、と思う。一人になれる書齋を持つのは当面の小さな夢である。

カバンを開け、今買ってきた坂本二郎の「知識産業革命」を広げる。タツプリー一時間、集中して本が読めた。読書を楽しむ、という言い方がピッタリする。読書している、と言うことに酔っていたのかも知れない。一時間がすぐ来てやはり中に入ったが、映画なんか見なければ見なくても良いような気持だった。もう二時間ほど、ユックリ本が読めればそれでも良いような気持。五五〇円で三時間のプライバシーが買えれば安いものである。

(昭和四十五年十一月二十九日)

喜美子

とうとう来るものが来た、と考えねばならないのですが、現実の中々そうは割り切れるものではありません。四月四日、喜美子は四十才の生涯を閉じました。

諸兄にはその当日から詰めて頂き、力になって頂きましてどうもありがとうございました。ああいう時、力強く支えてくれる友人、兄弟がいるのはありがたいものだ、とつくづく思ったことでした。

何か残してみたい、と、付き添いの徒然や事後、休んでいる間に書いてみたものが溜まりました。自分のものとして取っておくべきものの様な気もしますが、諸兄姉には腹藏なく聞いてもらいたいところもあるし、残しておくのに他に適当な場もないので、「珊瑚」の場を貸していただくことにしました。長くなるし、お聞き苦しい点もあるうかと思いますが、勘弁して下さい。

一・発病以来

思い出してみると、昭和四十五年六月、第一回目の手術をした時、開いてみただけで、「悪いところに来ていて。これはとても取れない」、と言うことで、試験片を取ったのみで、そのまま閉じた、というのが発端でした。小脳と延髄の間に出来た腫瘍で、腫瘍自体は悪いものではないが、如何にも出来た場所が悪く、手の付けようがないから一日も早く帰って自宅での生活をさせてやりなさい、と言われて途方に暮れたのでした。手術は成功だった、とウソを言っただけで帰って来たものの、快くなる訳はありません。毎日顔をつき合わせている相手を騙すのに苦労しました。それから二度の手術で取れるだけ取り、左半身は不自由になりましたが、それで十年間持ったのですから、そう考えれば恵まれていた、と言えなくもないのです。

その間、曲がりなりにも自分の家に住まわせ、小さいながら好きな庭いじりもさせてやれました。身体は不自由でしたが、家の中のことは一通り出来るようになり、子供も上は小学校から高校入学まで、下は幼稚園から中学二年まで世話が出来ました。美貴の

高校入学の決まるのを待つようにしてこういうことになったのも偶然ではないような気がします。自分の口から言うのも変ですが、人一倍働き者で、きれいい好きで、身の回りがキチツツとしていないと気が済まない方でしたから、不自由な身体でやりたいと思つたことがやれなくて口惜しい思い、ジレットタイ思いをしたに違いありません。でも、不平一つ言うでなく頑張りました。少し乱暴でしたがロンドン駐在のため二年間家を空け、子供と三人で生活させたのは良い試みでした。不自由な身体で外地の生活は無理と判断したのが単身赴任の第一の理由ですが、病後はどうしても依頼心が強くなるので、突き放すことにより精神的にもリハビリテーションをしよう、との試みでした。その間、長崎の母（老人）、本人（病人）、子供（小四と小二）という最悪の組み合わせの四人連れでロンドンまで旅行し、一ヶ月だけでしたが一緒に海外生活をした上、欧州大陸横断バス旅行までやったのですから大したものでした。国内旅行も長崎へは何度か、京都での集まりでは山歩きすらしめましたし、小旅行も数々楽しませてやるのが出来ました。自分でも不自由なりに精一杯やるだけやった、と思つていのではないのでしょうか。

そう言えば、家を持ったのも病気がきっかけでした。発病したのは駒沢の社宅にいた頃でした。三度の手術を終えて一段落したのですが、左半身の麻痺が残りました。アパートの階段が如何にも危なくて不便だったのが思い切りのきつかけになりました。あまり長くない一生をコンクリートの壁の中で終らせるのは可哀想。花の世話、土いじりが好きでしたから、小さくても庭のある家に住まわせてやりたいと思いました。社宅の間は親切に良くしてくれましたが、何か弱みを見せたくない、という見栄とかツツパリがあつたのも事実。丁度その頃、駒沢のあの辺が大掛かりな道路工事中で、車の混雑が激しく、美貴が変な咳を始めたことなんかも引き金になったのでした。一戸建てを買うとなると当時の私の実力ではこの家を中古で買うくらいが精一杯でした。狂乱物価のはじまる一寸前で、良い買い物をした、と言われますが、何せ遠い、一時間半の通勤は当時はそうでもありませんでしたが、四十男には堪えます。でも、病気がなければあの時点での思い切りは出来なかつたでしょう。喜美子も充分エンジョイしたことと思います。

後から聞いてみると、見舞いに来てくれた人たちや最後まで付き添ってくれた付き添いの小母さんに、自分は幸せだった、幸せすぎてバチが当たったのかも知れない、なんて繰り返し言っていたそうですから、こちらも少しは救われるような気がします。

二・気丈

それにしても良く頑張りました。身体の方は全く元氣、五回も頭を開く大手術を受け、これだけ長い間薬漬けになりながら、心臓も肝臓も腎臓も何ともなかったと言つので、から・・。この十年間も他に病氣らしい病氣はしませんでしたから、身体の方は頑健と言つても良いほどだったと思います。内臓自身の病氣でやられることがないから長生きしたことでしょう。それが内臓を司る神経の大本をやられるなんて・・。

精神的にはシツカリしていました。氣が強くて物事がキツチリしていないと氣が済まない方でしたから、不自由な身体になつても何とか工夫して家の中はキッチンとしようとしていました。台所なんかも買ひ物が自由に行けませんから、週末に買ひ置きしたもの

を、大きな冷凍庫とタツパウエアをフル活用して工夫していたようです。ハンディを見せまいと少々意地になってやってやっているむきもありましたが、それが又良いリハビリテーションになっていたのかも知れません。思い通りに行かず歯がゆいこともあつたでしょう。同じことをやるにしても、人よりも時間も掛かるし疲れもしたのでしょうが、一言も小言を言いませんでした。精神的に異常な面が出て来ても仕方のないような状況だったかも知れませんが。一寸イライラする位のことはありませんでしたが、大きくは表に出さなかつたように思います。何事につけても皆に迷惑をかけて申し訳ない、という気持が先に立つものですから、最後まで、申し訳ない、済みません、の連続でした。私自身、他人に対する思いやりは忘れてはならない、忘れたくないもの、と常々考えてはいますが、一番感動するのは、自分本人が苦しんでいる時に、他人に対する思いやりを示す余裕を持つことのできる人を見た時です。喜美子の場合も、手術の後、付き添っていると、自分が一番痛い目に遭い、苦しいところなのに、付き添っている私を慮って、眠くて大変だろう、とか、疲れるだろう、とか言ってくれます。会社帰りや休日に見舞いに行くと、

見舞いに来てもらっただけが楽しみの方なのに、会社に迷惑をかけて申し訳ない、疲れているのに来てくれて済まない、折角の休みをつぶして悪いね工、早く帰って休んでくれ、とそればかりでした。

度重なる手術に耐えてきたのも、自分が痛い苦しい目に遭っても、少しでも快くなれば皆に迷惑をかけずに済む、と思えばこそではなかったでしょう。こちらは先生から聞いた事実を、どう話せばショックを与えずに済むだろうか、どう騙したらよいのだろう、何てことばかり気にしていました。その辺は何もかも承知の上で騙されていた面もあったみたいないな気すらします。明るさも失いませんでした。身体の不自由さを笑いの材料にすることもシバシバでした。

昨年の四月から再度の入院生活に入り、五月と七月、二回の手術の後、一つの試みとして十一月から二ヶ月間リハビリテーションの病院に移りましたが、流石にこれはずらかったようです。訓練自体はそれ程きついものではなかったようですが、何とか少しでも快くなろう、身体を動かせるようにしよう、とする努力の一方で病気が進み、毎日の

訓練で効果が出て来て段々楽になるどころか、逆に段々に不自由になるのですからたまたまのものではなかったでしょう。ホトホト疲れた、と泣き言を言いますから、卑近な例を取り上げ「運動部の生活を見る。一つのことには習熟しようと思つたら、一番元気盛りの健康な若者ですら泣きながら練習し、血の小便を出すくらい努力するんだ。ましてや不自由な身体でまともな生活をしようとするのだから、それ以上に努力せねば駄目だ」なんてハツパをかけていたのですが、リハビリテーション専門の医者に言わせても、それは酷、とのことでした。良くあれだけ頑張っている、精神力の強さには感心している、と言つのが評価でした。

その医者がハツキリした人で、愈々リハビリでは駄目だ、と見切りをつけた段階で、元の病院に戻す相談をした時、病院を移る間に出来るだけ長い間家に置いてやりなさい、と言つてくれました。シャバで生活できる最後のチャンスになるかも知れない、と言つのです。それだけの病気の進行が見えたのでしょうか。こちらはそれ程深刻に受け止めていませんでしたからビックリしましたが、思い切つて二週間の休暇を取り、一緒にいて

やることにしたのでした。これはつらかったけど、今になってみると、良いことをした、とつくづく思います。とにかく手足が全く利きませんから完全なフルアテンド。朝起きれば食事の支度の後、着換えに始まり、抱え上げて車椅子に乗せて洗面。歯も磨いてやりません。食堂に連れて行き、食事を口まで運ぶ。薬を飲ませる。後片付け、洗濯、掃除。買い物も一時間と家を空けられません。日中のトイレ、二日に一度の風呂。夜は呼び鈴代わりにスイスで買ってきた牛の首につけるカウベルを枕元に置いておき、用事のあるときに鳴らすことにしましたが、ひどい時は夜中、一時間半おきくらいに鳴るのです。それでも良い患者で、我儂は一切言わず、何をやっても、申し訳ない、ありがとう、で感謝してくれ、やり甲斐はありました。

リハビリの病院から出てきたときはスツカリ疲れ果てていて、弱気になっており、もう駄目、という感じでしたが、二週間の間に食べるものも食べ、友達に会って激励され、亭主に面倒を見させて気持ちも落ち着いたのでしょうか。もう一度頑張ろう、手術でも何でも受けてやろう、という気になったようでした。精神的にも穏やかな様子でした。悟

りを開いたような感じすらしました。遺言めいたことも言っていました。子供のこと、再婚のこと、いわゆる形見分けめいたこと。

この二週間で余程嬉しかったようです。再入院してからも事ある毎に、誰彼なしに、楽しかった、主人に良くしてもらった、と言っていたそうです。こちらも十年間の看病生活の締めくくりみたいで、心置きなく世話をしやれて良かったと思っています。リハビリの先生から話を聞いたときは、酷いことを言う人だ、と思ったことでしたが、今になってみると良くあれだけハッキリ言ってくれたもの、と感謝しています。

最後まで精神的にはシツカリしていました。再入院後、目に見えて病気が進行して行く中で、最後まで泣き言を言わず、闘う姿勢を崩しませんでした。首の手術が決まった時も、ありのままを話したら、嫌がるわけでなく、怖がる訳でもなく、少しでも可能性があるものならやって貰おう、やるなら早くやって欲しい、と言うほどで、その精神力には感心させられるばかりでした。その手術が間に合わず、意識がなくなる前日の三月十一日の夜、何か自分で感じたのでしょうか、付き添いの小母さんに「何だかこのまま

逝ってしまいそうな気がする。主人に長いことお世話になりました。ありがとって伝えて下さい」と言った由。これが殆んど最後の言葉になったそうですから、最後の最後まで意識はシツカリしていたし、精神的にも正常だった、と言えるのでしょうか。

三・再入院　――　死

二月十二日再入院後は検査が続きましたが、方針決定を待つ間にも病状はドンドン進むように見えました。手が上がらなくなる。足のツツパリがなくなる。声が出難くなる。呑み込みが不自由になる。呼吸が浅くなる。

三月六日、最終検査を残しての中間報告ということでしたが、「延髄に障害がきている。手の付けようがない。外科的にはどうすることも出来ないの、対症療法しかない」と事実上の諦め宣告を受けました。突然、嵌屯（カントン）と言う現象が起こって、即、死に繋がる危険を常にはらんでいる、とのこと。丁度、神戸に出張せねばならない羽目になっていたのですが、その間にこう言う事態が起こる可能性がないか聞いてみると、

二日くらいならまず大丈夫でしょう、位の話なのです。一週間ほどアメリカへ行く予定があると話しましたら、七対三位の可能性で大丈夫だと思う、などと言われるものですから、こちらの方は出張期間を最短に押さえる手筈をしたのでした。先発隊を出してネゴを始めさせ、タイミングを掴んだら夜中に電話をかけてもらい、即日出発して二・三日で仕事を済ませ、とんぼ返りする、という手筈を整えました。旅行用カバンも常時会社においておくことにしたのでしたが、結局こんなことになって先発隊は二階に上げられて梯子を外されてしまい、会社には大きな損をかけることになりました。

三月八日、日曜日に呼び出しあり、最終検査の結果、可能性が少し出て来たことを伝えられました。首の部分に同じ種類の腫瘍があり、背髄を圧迫していると考えられるから、これを手術で取り除けば少しでも楽になる可能性があるとの事。座して待つより数等良いことは言うまでもありません。二つ返事で承諾しました。本人も覚悟が出来ていたのでしょう。何時手術になるのか心待ちにしていたらしく、やるのなら早くやって貰おう、と言うことになりました。この手術は整形外科の関係なので、そちらの関係の先

生と打ち合わせ、三月十七日にしよう、と決めたのが三月十日のことでした。この日が意識のある間に会った最後の日になったのですが、どんな別れ方をしたのか覚えていません。とにかくシツカリしていました。手術のことを聞いても全く平気な顔。少しでも良くなるなら早い方が良いわネ、と言うほど。又心配かけるわネ。迷惑かけて申し訳ない、と平静な態度でした。こちらもスツカリ安心して、何時もの通り、オヤスミ、と別れたのだからと思います。

一時の絶望的な状態から一転、若干の光明が見えたと思ったのも束の間、三月十二日の早朝、病院から電話。前夜、意識不明になったから急いで来てくれ、と言うではありませんか。行ってみれば、酸素吸入を受け昏睡状態。話を聞くと、前夜、夕食後気分が悪いといって酸素吸入を受けたが、夜中の一時ごろ様子がオカシイので、見ると意識がなくなっていた、と言います。完全に脳幹、それも延髄への障害の症状の由。意識障害の後は呼吸が止まり、次に心臓へ来たらもういけない、とのこと。元に戻る可能性はないが、人工呼吸と心臓に対する薬の投与で命を延ばすことは出来る、やりますか、との

相談を受け、出来るだけのことをやってもらうことにしました。患者に苦痛があるのなら早く楽にしてやる、ということもありましようが、見たところ苦しい様子はなく静かに眠っているように見えましたから。

すぐに呼吸がオカシクなり、人工呼吸が始まりました。最初の内は自分の呼吸も少しはあるので機械と喧嘩したりしていましたが、段々にそれもなくなり、人工呼吸だけに頼るようになりました。心臓にも障害が来て血圧が下がって来たので、イノバンとかいう強心剤を連続的に投与。これが切れるとすぐ血圧が下がり危険な状態になるのですから、呼吸は機械に、心臓は薬に頼って生きているだけ、という状態になりました。

どんなに酷い状態になっても、人間は希望さえあれば生きて行けると言います。元に戻る望みは消えましたが、それでも最初の二日ほどは、時々パツと意識が戻るのだからが希望になりました。判るか、と言えはかすかにうなずいたり、ずつと側にいて上げるからね、と言えは心なしか嬉しそうに笑顔を見せたり、こうした反応があれば付き添っていても張り合いがあります。何時そうした状態になるか判らないので、目をあけ

たときに何時も側にいてやろう、と付きっ切りの付き添いをしていたのですが、その希望もなくなつた訳です。

こうなつたら数日から一週間の命だ、という医者診断でしたので、そのまま付き添うことにしました。妹の靖子が一緒についてくれましたし、付き添いの小母さんと三人がかり。病院で借りた簡易ベッドと待合室のベンチがねぐらになりました。近くにあるホテルの部屋を借り切って交代で寝たこともありました。

この間、心臓が止まつたのが二度。血圧が下がって測れなくなつたことは数知れず。体温が下がって体温計で計れなくなつたり、尿の出が止まつてしまつたり、医者には何度も、もう駄目だ、といわれましたが、その都度持ち直し、人工呼吸と点滴だけで三週間以上も持つたのです。医者も看護婦も驚くほどの生命力でした。

昏睡状態になつてから二十三日目の四月四日の朝七時過ぎ、看護室から心電図の状態がオカシイとの警告があり、七時四十八分、疲れ切つたように、消えるようにいけなくなつたのです。最後は「良く頑張つたね。もう充分だよ。ご苦労さま。ゆっくりお休

み」と心の中で言っただけでやりました。

外を見ると、この日は丁度桜が満開。上天気の中で花びらが一枚・二枚落ちていたのが見えました。外の明るさと内の暗さ、世の中にはこんな天国と地獄のような差が存在するのだな、と考えていました。

さまざまの　こと思い出す　桜かな　芭蕉

四・病氣

脳腫瘍の診断を受け、十一年前に開いた時、グリオマという悪性の腫瘍と診断され、それも小脳と延髄の間、という悪い場所に出来ている、ということ、これは手が付けられない、もう駄目だ、と言われたのでした。その後の検査で、神経腫と言ったことがハッキリしました。神経腫はそれ自体は悪性のもではなく、毒を出したり健康な部分に入り込んで行ったりすることはないようですが、ものが大きくなれば周囲を圧迫して物

理的に悪さをするといいものなのだそうです。

脳に出来た、とは言っても、場所さえ良ければ直ぐに取れば何てことないのだそうですが、出来たところがいかにも悪い。延髄と言えば生命を司る脳幹の部分で、ここには全く触ることが出来ないのです。周りの小脳の部分を取れるだけ取ったものですから左半身が不自由になりました。でもこれで十一年間持ったのではないでしょう。昨年五月の手術も延髄には全く触れず、小脳を触っただけ、とのことでした。

又、この神経腫はレクリングハウゼン氏病とか言って、多発性なのだそうです。首の部分に出来たのも同じ種類のもので、脊柱の内側に出来た小指大の腫瘍が脊髄を圧迫して悪さをしているとのことでした。医学の進歩の一助となり、将来同じ病気で苦しむ人を一人でも減らすことが出来れば、と、医者への依頼に従って解剖して貰いましたが、やはり脊髄に五つ位の神経腫が出来ていたとのこと。生命を奪ったのは延髄の障害ですが、手足の痺れとか麻痺とかは、この脊髄に出来た腫瘍が原因だ、とのことでした。どうしてこんなものに取り付かれたのか。細胞の病気ですから一種の癌ですが、原因は判らな

いのだそうです。敢えて言えば体質、とのこと。出来る人には出来て、止めることは出来ないといひます。医学も進んでいるようですが、まだ手の届かないところがある、と十一年間診て下さった先生も残念がつてくれました。

発病したのが三十才になる年。それから十年間は不自由な身体で生活せねばならなかつた訳です。心から楽しいと思つたことがあつたのかどうか。迷惑をかけて申し訳ない、と思ひ續けていたのではないのでしょうか。第一回の手術後、まだ糸も取れないつらい時に、退院したらこま鼠の様に働いて恩返しするんだ、と言つたのが、今でも耳の奥に残つています。病気で充分つらい目に遭つていながら、常に、濟まない、濟まないと思ひ續けていたに違ひない半生を思うと哀れでなりません。やり直せるものならもう一度同じ結婚をし、同じ子供を作つて、病氣のない元氣で幸せな一生を送らせてやりたいと思ひます。

法名は（浄土真宗では戒名とは言わぬ由）

貞堅院釈美妙大姉

最初はもつと温か味のある明るい名前が良いのに、と思いましたが。固くてシツカリ者、という印象のみが強いような気がしたからです。でも段々に何かシツクリして来て好きになって来る良い法名です。(了)

(昭和五十六年五月二十四日)

再婚のご挨拶

新緑の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。さて私こと、恥ずかしながらこの度再婚することに致しました。先妻を亡くして五年、この間皆さまには多大のご心配をお掛けし、ご迷惑もおかけしたにもかかわらず温かいご支援を頂戴しどうもありがとうございました。

子供たちにも苦勞をかけたましたが、良く頑張ってくれました。今年は娘の美貴が恵泉女子学園短期大学を卒業し、三菱商事のお世話になることになりました。息子の達直は神奈川県立弥栄西高等学校を卒業し、大学入試に向けて更に勉学にいそしむことになりました。こうした状況下、生活が成り立たなくなったのが一つのキツカケにな

りました。

この異常な事態の中に飛び込んできた奇特な人は

茅ヶ崎在住 河野 鉦一、安子の長女 恵子です。

一同力を合わせて明るい家庭を築いて行く積りです。今後とも倍旧のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。辺鄙なところですが、遠足がてらお立ち寄り下さいませんか。

昭和六十一年四月六日

子離れ

三菱重工工業を離れ、長崎のハウスステンボスに向かうに当って、一番辛かったのは子供達との別れだった。この二人の子供達とは、本当に幼少の頃か

ら力を合わせて一緒にやってきた。ここで分かれてしまうと、もう一生同じような生活は出来なくなるのだと思うと、別れが辛かった。小田急の東林間の駅まで送って貰い、別れて横浜方面に向かう小田急に乗ったが、電車の中でもどうしても嗚咽が止まらず、周りの人に恥ずかしい思いをしたのを良く覚えていいる。

西彼杵郡西彼町

三菱を離れて長崎に行くに当って、仕事上の不安は別として、色々考えねばならぬことがありました。

まず子供達のこと。この子供達には苦勞をかけました。幼稚園か入園前から母親がまともでなくなり、ズット不自由な目に遭わせました。亡くなったのが美貴の高校入学式前

日だったのですから、母親の愛情が必要な時与えてやれなかった、ということでしょう。小さい頃から助け合つて来ました。ですから、この子達は私にとつて子供と言つより、一緒に苦労し、戦つてきた戦友みたいなものなのです。子供に甘いとか、親馬鹿だとかの聲が時々聞こえて来るけど、これは仕方のないことなんだ、と甘んじて受けてきました。ここで離れ離れの生活を始めてしまつたら、キツと一生、一緒に生活は出来ないでしょう。でも考えてみたら、私が長崎を離れたのが十八の時、それからズツと親とは別の暮らしをしています。いつまでもベタベタしているのは、親離れをしない子供のせいではなくて、子離れの出来ない親のせいではないか。お互いが独立するにはこの辺が潮時ではないか、とも考えました。美貴は卒業後、一旦三菱商事に勤めましたが、二年で退社し今は家に居ます。その内に（上手く行けば）家を離れて行くでしょう（但し、未だ候補者は居ないみたい。ライバルが多くて大変ですが、良い話があつたらよろしくお願ひします）。達直は大学二年ですからもう二年もすれば就職して、勤務地によつてはやはり家を出て行くことになる。どうやら二年か三年早いか遅いかだけの話だ、と割り

切ることになりました。子供達に話してみると、本心がどこにあるかもう一つ判らないけど、左程抵抗があるようでもありません。大丈夫、二人でやって行ける、と言います。幸か不幸か小さい頃から二人だけの生活には慣れていて、出張だと言つては家を明ける仕事だ、付き合いだと夜はまともに帰る日は少ない。休みになるとゴルフに出かけてしまふ。こんな勝手をする親父が一人いない方が気楽にやって行ける、ということなのかも知れません。

奥さんの方は、神奈川県を離れたことのない人ですから、不安はあるようですが、新しい生活に挑戦してみよう、ということ。長崎行きに備えて自動車運転免許を取ることになりました。一番短期間で免許が取れるのは、地方での合宿、ということなので早速福島県で合宿に入り、一ヶ月以上掛かりましたが、やっと間に合いました。

相模原のこの家は、十七年前に無理して一〇〇〇万円足らずで手に入れたものですが、今や借金も殆んど払い終わって、一寸した財産になっています。今、手放してしまったらもう二度と手に入れることは難しいでしょう。将来、二度とここには住まないかも知

れないけれど、貸家にでもすればよい。第一、息子の学校が後二年ありますから、当面は子供達をここに置いておかねばならない。娘に家と弟を預けて二重の生活をする事になります。長崎では市内からの通勤では一寸大変だ、と言つたら、先方で準備してくれると言います。会社の近くに社宅があるのでここに入ることになりました。

収入のこと。身を売る他にあてのないサラリーマンとしては、収入の確保が最大の関心事。特に未だ学校に金の掛かる息子を抱え、東京と長崎との二重生活を考えねばならぬ、とすると、収入が下がるのは困るのです。重工の方は定年前ですから、出向という制度があります。五十五才までは籍を残しておけば、それまでは重工で貰える収入は確保出来ます。新しい勤め先の収入が低ければ、その差額は重工の方で補填してくれると言つ仕組みです。また、籍を残しておけば、イザというときには戻つて来れる、という安心感もあります。でも、一旦踏み切つたら失敗したからと言つてオメオメと戻つて来れるものではありません。収入さえ大きな差がなければ、ここは潔く重工を離れようと言つ覚悟は直ぐに出来ました。自分の割り切りもさることながら、受け入れる方もその

方がスッキリするのではないかと思つたのです。最終的な覚悟がハッキリ出来ていたので、話は早かつた。現在の年収を示し、ここまで頂ければ重工を退社するし、そうでなければ出向の形にする、という言い方ですから、先方も判り易かつたと思います。で、やはり収入が少し足りないので、当座は出向の形にして貰うことにしました。自分としては、こんな具合にスッキリ割り切っていた積りでしたが、出向と言つとどうしても暗いイメージがあるようです。君もとうとう出されることになつたのか、君だけは最後まで残る人だと思つていたのにモットイナイ、という言い方になるのです。

決まつた以上、サツと恰好良く消える積りでいました。本当に親しくして頂いた方々のみにご挨拶して、早めに向こうに行つて新しい生活の準備を整えよう。先方へも顔を出してウオ ミングアップを始めよう。皆が知つた頃は、アレ、もう行つちやつたの、つてな具合にしてやるう、と準備していたら、官僚主義の会社のこと、手続きがモタモタして間に合わなくなり、結局月末までいることになりました。そうなると大変。ニュースが広がると、あちらからこちらから送別会のお呼びが掛かつてきます。出来るだけ

ご遠慮はするのですが、やはり三十年間の付き合いと言うのは無視できません。結局、公に私に、昼夜合わせて五〇回の送別会をして貰うことになりました。皆夫々に心配して下さり、名残りを惜しんで下さるのですから誠に有り難いのだけれど、送別会と言うものはあまり沢山やるものではありません。最初は、新しい仕事に張り切って飛び込んで行く心組みだったのに、連日連夜お別れ会が続いている内にこちらも段々暗くなって来て、最初の勢いがなくなつて来ます。こんな決断をして良かったのだらうか、という疑問も出て来ます。カッコ良く消える、なんて夢はどこかへ行つてしまつて、仕事の引継ぎが終ると、昼と夜だけが忙しい、という誠にズルズルと恰好の良い形になりました。ゴルフだけは、最後の機会がロンドン駐在員経験者の会でしたが、これはブツちぎりの優勝で、良い思い出が出来ました。最終のロングで三打目のアイアンの四番がきれいに振り抜けてスリーオンのパー、と誠にスカツとした気持の良いゴルフが出来ました。

と言うことで、六月三十日付で三菱重工を退職しました。七月一日に荷物を発送、二

日に移動、三日に荷物を運び込んで長崎県西彼杵郡西彼町（にしそのぎぐんせいひちょう）に落ち着きました。四日から新しい会社に出社。どういふことになりますやら、どうぞよろしくお願いします。

（平成元年七月四日）
（生い立ち編 了）